

第3回西宮市都市計画マスタープラン策定委員会

日時：平成22年8月14日（土）

場所：西宮市大学交流センター

セミナー室2 アクタ西宮

東館6F

時間：14：00～16：35

久委員長 それでは、おそろいになりましたし、時間も2時になりましたので、始めさせていただきます。お盆の真っ最中ということでございますけれども、お集まりいただきまして、ありがとうございます。

 それでは、まず最初に事務局のほうに出席状況の御報告をお願いしたいと思います。よろしくをお願いします。

事務局 事務局、景観まちづくりグループの青山でございます。本日はありがとうございます。

 きょうの出席状況は、12名の委員のうち、11名御参加いただいております。よろしくお願いたします。

久委員長 ありがとうございます。

 それでは、続きまして傍聴の希望状況はいかがでしょうか。

事務局 ただいまのところ、傍聴希望者はございません。

久委員長 また、来られたら随時ということでもよろしいですか。

事務局 はい、お願いします。

久委員長 よろしくをお願いします。

 それでは、前回の続きになりますけれども、きょうの議事は、ビジョンを取りまとめようということでございます。

それでは、まず事務局のほうから資料の説明をお願いできればと思いますが、よろしく申し上げます。

事務局 まず資料の確認をさせていただきたいと思います。

本日の次第、資料1としまして、都市計画マスタープランの「暮らしとまちのビジョン(案)」、資料2としまして「西宮市のまちづくりを取り巻く潮流」、資料3としまして「上位計画・関連計画におけるまちづくりの方向」、それと資料4としまして、「地域社会の変遷と文教住宅都市宣言の社会的背景」でございます。そのほかに、今のマスタープランの全体構想と地域別構想の概要をまとめた概要版、西宮市の21年の現況データをまとめた統計書をお配りさせていただいております。特に不足されている方はございませんでしょうか。

それでは、資料の説明に入らせていただきます。

まず、資料1の「都市計画マスタープラン 暮らしとまちのビジョン(案)」を説明させていただきます。

まず、A3の資料ですが、上半分部分にこれまで議論をしていただいた部分、ワークショップでまとめていただいた提言と第2回の策定委員会で出たキーワードをまとめてございます。左下段、まちづくりを取り巻く潮流であるとか、上位関連計画に触れております。真ん中下段から右については、前回までの議論を受けまして、事務局のまとめ方の考え方として、基本理念とまちの将来像という、こういう構造でまとめてはどうかということを示唆をさせていただいております。

上段の上半分に戻りますけれども、これまでの議論の中でワークショップでまとめていただいた提言、それからこれまでの議論を七つのキーワードにまとめています。一つ目は「つながり」、次に「豊かな自然・緑」「歴史・文化・教育」「やすらぎ」「楽しさ」「安全・安心」「人育て・まち育て」となっています。

それと、右側の第2回の策定委員会では、利便性が東西方向には高く南北方向には低い、それと洗練されたイメージとして、「オシャレ」、「スマート」、「クール」、そ

れと、「リビングのような空間」「緑がもたらす都市の風格」などの言葉が挙げられたと思います。

それと、左側、これまでの議論と左側の潮流、上位計画関連ですが、こちらのほうは、資料2のほうで説明をしたいと思います。

これまでに社会潮流として、震災後の人口動向や、市街地の変化、地球環境の負荷、持続可能な社会の要請、価値観やライフスタイルの多様化、新しい公共という言葉が挙げられてきたんですけども、データとして見てみるとこういうことがあるんじゃないでしょうかということで、まとめております。

1ページ目の左上、人口としましては、大正4年から平成21年までの分を載せているんですけども、震災を除きまして基本的には右肩上がり続けておりまして、現在、約48万人となっております。右肩上がりですが、カーブとしてはだんだん緩やかになってきております。

世帯当たりの人数としては、今、2.5人を割っているぐらい。人口増加率が、ここ12年、17年、21年と増加率のほうは減ってきておりまして、今のところ増加はしているんですけども、緩やかになってきているという状態がございます。

市街地の変化でよく話題になりますマンション動向の建設動向を左の下に掲載しておりますけれども、平成7年、8年、それから11年にかけては、3,000戸から4,000戸のオーダーで開発の申請がございましたけれども、ここ数年は1,000件オーダーを割り込んでおりまして、21年、20年につきましては、500戸強ぐらいの開発の申請状況になってきておると、だんだん鎮静化しているという状況でございます。

右の上は、市街化区域内にある農地の面積の推移としまして、平成16年から21年まで、平成16年に150ヘクタールを超えていた市街化区域内の農地ですが、21年は140ヘクタールを割ってございまして、徐々に減りつつある、宅地化が進行しているという状況が読めます。

商業系で見ますと、右側真ん中で大規模ショッピングセンターで1万平米を超える店舗が、新大法が施行になりました12年以降で見ますと、ACTA西宮を初めに、20年にオープンしました阪急ガーデンズが最後となっております。

ただ、件数はそんなに多いものではなくて、1年に一つあるかどうかというような動向になってございます。

この内容に関連する施策としては、この右下にまとめてあるような施策がとられております。

次のページ、2ページに移ります。裏面です。

「地球環境への負荷の小さい持続可能な社会への要請」ということで、西宮市の現状としましては、左上、エコ活動としましては、これは小学生、子供向けなんですけれども、アースレンジャーというのを実施しておりまして、年々参加・関心が高まっているというのがグラフからわかると思います。

左の下、温室ガス効果の排出量を西宮市として見た場合は、ほぼ平成2年から総排出量としては大きく変わっていない状況です。

中の内訳を見てみますと、真ん中下あたりの黒い家庭部分というのは増加傾向にあるように見られます。

右の上側、農家の状況でございますが、農家の数は昭和41年に1,400戸程度あったのが平成17年には500戸程度ということで、3分の1に落ち込んでいる。同じく、経営耕地面積につきましても、600ヘクタールあったものがほぼ200ヘクタールぐらい、やはり3分の1、農家の人口につきましても、7,000人強いたものが、今、2,000人弱ということで、やはり3分の1ということで、40年で3分の1ということの傾向が見れます。あと20年たつとゼロになると、理屈で言うとそうなる流れになっております。

交通の問題で見ますと、この右側のバスは西宮市が21年度から本格実施しております「さくらやまなみバス」の写真でございますが、左のグラフは登録自動車数、こ

れは軽自動車を除く自家用車数ですけれども、平成17年を頭に減少傾向が続いております。軽自動車に移った部分があると思われるので、一概に言えないんですけれども、下がっている傾向が続いております。

それとあわせて、右側の鉄道・バスの利用者の推移としましては、平成15年、16年からございますが、1日26万人から27万人、1万人程度増加傾向になっております。

バスのほうは、平成16年が4万5,000人強であったのが、平成20年には5万人程度に1日の乗車量がふえておりまして、公共交通を利用する方がふえていらっしゃるというような現状が見てとれます。

3ページに移ります。

「人々の価値観やライフスタイルの多様化」ということで、関連する点としましては、まず左上、「住みたい街ランキング」ということで、新聞にも載っていましたが、長谷工アーベストの調査で「住みたい街ランキング」で西宮北口が初めて1位に選ばれております。夙川も常に上位に入っておりまして、今回は6位に入っておりまして、2駅がトップ10に入っております。

右側は「住んでみたい街アンケート」ということで、これは大手不動産8社によるメジャー7という調査なんですけれども、こちらでも2位に西宮、3位に夙川ということで、こちらもトップの、関西では上位に入っているという意識になってございます。

それと、左側下、「まちなみ発見クラブ」ということで、美しいまちなみに関する景観に取り込もうということで関心が高くなっておりまして、子供向けの活動とかも市民の方が中心となって行われております。

右側の上、防災関連としましては、自主防災組織率、人口ベースでいっていますけれども、震災前には22%であった自主防災組織率が現在89.5%と9割に迫っております。かなりの伸びを見せております。皆さん、自主で防災するという意識が

高まっているということが見て取れると思います。

それと、右側の下、新しい公共ということで、NPO等の登録数が平成11年度は1けたであったものが、今現在、21年度は150件を超えておりまして、右肩上がりの状況でございます。

それと、裏面にいきますと、地区計画、自分たちのまちを自分たちでルールを決めていく都市計画でございますが、現在、西宮市では32地区ございまして、この地図に載っている地区で地区計画は都市計画決定されております。かなりの数でございます。阪神間でも割と進んでいる状況でございます。

このような状況がまず社会潮流としてあると思われまして、それと資料3のほうに上位計画をまとめ直してございます。

資料3では、上位計画の構造とキーワードを中心にピックアップをしております。

左側が西宮市の総合計画、西宮市の総合計画では、基本目標として「ふれあい 感動 文教住宅都市・西宮」を中心に据えております。

この下に将来のまちのイメージとして5本の柱を立てておりまして、「市民一人ひとりが輝いて生きるまち」「子ども達の笑顔があふれるまち」「みんなが安心して暮らせる安全なまち」「水と緑ゆたかな美しいまち」「人々が楽しく交流する元気なまち」となっています。これを受けて、具体的にその下で施策が行われているという状況でございます。

右側は兵庫県における都市計画の方針ですけれども、Aとしましては「広域都市基本方針」として、全体の大きな方針を兵庫県が出しています。

共通編の中の目標としては、「生活の質を向上させる都市づくり」「にぎわいと活力を生み出す都市づくり」「安心して暮らせる安全な都市づくり」「広域的な交流と連携の都市づくり」というのを目標に掲げています。阪神地域の目標としては、「環境と調和し、伝統ある市民文化に支えられた活力あふれる都市づくり」というのを基本方針として掲げてございます。

これを受けて、阪神間の都市計画の区域マスタープランでは、目標としまして、「既成市街地再生のためのネットワークづくり」「阪神らしい良好な居住環境の形成」「自然や歴史・文化などの地域資源と調和した都市づくり」「安全で安心な都市づくり」という四つを立てております。

資料 1 に戻ります。

先ほどの資料 2 と資料 3 が左側のまちづくりを取り巻く潮流と上位関連計画という部分で、この上位計画、潮流と、これまでに議論をいただいたキーワードと合わせまして、西宮市の都市計画のマスタープランとして基本理念、ビジョンとして「何々なまち 西宮」というようなキャッチフレーズで、その説明文をつくっていくという形を考えております。

それを受けて、まちの将来像として、市民の目線から見た「こういうまちに住みたい」という将来像を、ここでは八つほど立ててございます。これの具体的な説明資料としてつけております。A 4 の 1 枚ものがつけてございます。

この A 4 の資料、まちづくりの基本理念とまちの将来像ということで、事務局の案として、これまでの議論をまとめた四つの案を出してございます。今後、議論いただいて、まとめていただくこととなりますが、案の 1 としまして出ましたのが「品よく仲良く 住み良いまち・西宮」、案の 2 として「つながりでまちを育てる スマートシティ・西宮」、案の 3 は「人が集い つながり育む Living City・西宮」、案の 4 は「自然を活かし 歴史を活かし 老いも若きも つながるまち・西宮」という、こういう案を基本理念としてはどうでしょうかということで、事務局案として提示しております。

まちの将来像としては、こういう基本理念を受けた中では、8 個立てているんですけども、「緑につつまれた風格のあるまち」、「人のやさしさ・ふれあいを感じることのできるまち」、「いきいきと暮らすことのできるまち」、「地場を大切にするまち」、「“ほっ”とできる場面があふれるまち」、「人やまちの「品」を育むまち」、「笑顔あふ

れる安全・安心なまち」「のびやかなつながりを育むまち」の8つをまちの将来像として考えてはどうかという提示をさせていただいております。

以上が、このマスタープランのビジョン案についての説明でございます。

資料の4としてつけておりますのは、文教住宅都市の定義というのが第1回目、第2回目に出たと思うんですが、この西宮の現代史をまとめていただいた先生の資料がございましたので、これは参考にシテイタダイタラと思います。

ほかの資料も同様で、きょうの議論とは直接関係はしないかとは思いますが、今後の議論の中で出てくると思いますので、参考に、また御自宅に戻られてから御参照ください。

以上でございます。

久委員長 ありがとうございます。

それでは、今、いろいろ御説明いただきましたけれども、きょうの本題は、資料の1の1枚目でございます右下の部分です。一番重要なのは、ここの基本理念の部分の言葉を決めるということでございます。

2週間前にワークショップで2時間以上お話をいただきまして、かなりホットな議論で頭が煮詰まった部分でございますけれども、2週間たちまして、また再度、事務局なりに整理をしていただいて、四つの案が出てきておりますので、クールダウンした中で、もう一回、案の1から案の4までを見ていただいて、最終的にきょう、1本に絞りたいないように思っております。

それと、資料の1のところ、1ページ目の右下、2枚目のところの下部分ですけれども、八つつくってきていただいております。

この趣旨をもう少し私のほうから補足説明させていただきますと、基本理念のキャッチフレーズ一つでは、なかなか思いが全部組み込めません。そういう意味で、この下に八つぶら下げることによって、ワークショップの6班から出てきた内容もかなり含まれてくるのではないかなということと、前回の策定委員会でのワークショップの

議論の内容もこの中に含まれてくるのではないかなということ、基本理念の一つのキャッチフレーズと、それからまちの将来像の、今のところは八つ御提案いただいておりますけれども、この合計九つでかなりいろんな部分が表現できるのではないかなというように思って、この下の部分をつくっていただいたということでございます。

これは両方やると話がややこしくなりますので、まちの将来像がこういう形をつくということをご想定しながら、まずはこの基本理念のところの言葉を一つ決めていきたいと思っておりますし、その下に、今、5行で説明いただいておりますけれども、こういう文章でいいのかとかということも含めて、しばらく議論をさせていただきたいなと思っております。

いかがでございましょうか。まずは、この基本理念、今、資料1のA4の2枚目のところで四つ出てきておりますけれども、何か御質問、御意見等があればと思っております。

松本（康）委員 最初に進め方を御説明を、既にいただいたかもしれないんですけども、きょう決めましょうというのは、基本理念のキャッチフレーズを決めましょうという理解でよろしいですか、それともまちの将来像のところまで。

久委員長 最低限は基本理念です、最低限の義務はですね。できたら、まちの将来像まで決められると、次回は本体部分といいますか、より詳細な部分の議論に入っていけるだろうと思っております。

松本（康）委員 わかりました。ありがとうございます。

久委員長 そうということで、基本理念、かなり議論はさせていただいたんですけども、なかなか決着がつかなかったということで、きょうはここに絞りたいなと思っております。

大内委員 大内からですが、よろしいですか。

この理念の中の言葉をずっと見ていくと、さきに議論していないのが悪いかもしれませんが、たまたま4班の中でメーリングリストの中でやりとりしたときに出てきた言葉が、西宮市には、前にも出たというか、県の総合文化芸術センター、正確

な名前を今言えませんが、それがあって、やっぱり芸術文化、芸文のまちというのは大きな特徴じゃないかということが私どものメーリングリストの中で交わされまして、この今の理念のところを見ると、そういうことに当たる言葉がちょっと出てきていないかと、こう思ったのと、それから芸文を通して西宮市が海外との姉妹都市提携もあって、海外からのお客さんも結構あって、行き交う人々があると、そういうこともメーリングリストで出てきましたので、それも何か加味したような理念をつくり上げる必要があるかなというふうに思うんですけれども。

以上です。

久委員長 ちらっと出ていましたよね。

大内委員 市じゃなくて、あれは県ですよとかという話はあったと思うんですけれども、改めてちょっと私どものグループでそういうことが出ましたので。

久委員長 阪神南地域の議論の中では、「やっぱり西宮は芸文センターがあっていいですね」というのが西宮以外の方々からは出てくる言葉ですけれどもね。

松本（康）委員 5班の松本ですけれども、私どもの班の中での議論で、この基本理念とまちの将来像の事務局さんの案を共有しまして、それに対して出てきた意見として、移動であるとか、交通であるとかといったような問題というんですか、やはり年をとって車を手放したりということで、自動車の運転ができなくなるなというようなところを踏まえて、バスであったりとかの利便性が安価に利用できるということとか、あと徒歩で生活が一応充足できるというような、そんな視点もぜひ入れてほしいなという意見がありましたので、ちょっとこれは今のまちの将来像のキーワードの中、どこかに包含されているかもしれませんが、出た意見として紹介させていただきます。

久委員長 それは将来像のところ意識をしたらいいということですか。

松本（康）委員 そうですね、はい。

久委員長 なぜお聞きしたかと言うと、神戸なんかはそのあたりも踏まえて、

コンパクトシティというのが理念部分に出てくるのでね。

松本（康）委員　　そうですね、基本理念はどちらかと言うと既に「人と緑のつながり」というあたりで私どもの班では理解できていますので、その一つの具体策として、そういう交通の話も自分は考えていきたいなということですので、おっしゃるとおり、まちの将来像というところで意識をしたいなということとして上げさせていただいています。

久委員長　　いかがでしょうか、この理念部分、先ほど大内さんのほうから芸術・文化の意味をもう少しあってもいいんじゃないかなと。

田中委員　　ちょっと質問なんですけれども、芸文が西宮市にできたというのは、何か理由があったのでしょうか。なぜ西宮にあるのかなと思ひまして。

久委員長　　それも私、疑問には思っていましたけれども。

田中委員　　あるのは別に悪くないで、うれしいのですけれども、なぜそうなって、そうなったのかというのは。

久委員長　　一番のポイントは、ずばり土地があったからということがあるんでしょうけれどもね。復興計画の中の一つということで、目玉だったんでしょう。

田中委員　　それは地震以後に計画を立てられたものなんでしょうか。

事務局　　芸文センターは地震の前にございまして、あの場所であるということが決まっておりました。

事務局　　ちょうど北口の南の区画整理の大街区がありまして、当初から芸文センターがその大街区に来ていただくよう市のほうから誘致をかけていたという経過です。

当時は、バブル、華やかなところで、ホテルとかも併設してやって、ちょっとつぶれちゃいましたけれども、当時のニチイさんとかビブレ、サティも来るという一連の計画がございました。その中でも、芸文センターというのは中心的な施設ということを説明していました。

田中委員 わかりました。

瀬川委員 大内さんの最初に提示された班内でのそういう論議もありますけれども、今見ていまして、この資料1で、最初、市役所のほうから説明がありましたけれども、上半分、各班から出た言葉を整理するということで、点線括弧内の七つありますよね、この中にも歴史・文化・教育というのがありますけれども、このことが確かに下側のまちの将来像に抜けていると思うんですよね。

芸文というのは、一つの事例だと思うんですけれども、よく言われる西宮は大学が多い。大学というのも、市のどうのこうのじゃないんですけれども、文化・教育というのがやっぱり西宮の強みというか、特徴のような気がしますけれども、ただそれが都市宣言をしているだけの面もあるんですけれども、文化・教育というのをもう少しやっぱり具体的に見える形にするということはやっぱり大事なことはないかなと思うので、このまちの将来像の中にぜひキーワード的に押さえないかと。

久委員長 ちょっと整理させていただきたいと思いますが、総合計画ではなくて都市計画マスタープランですので、文化・芸術とか教育とかというものが都市計画のキャッチフレーズとか将来像としてどうなるのかということをもう少し意識しながらというか、教えていただきながら議論したほうが、確かに文化・芸術とか教育は大切なんです、総合計画ならば総合分野で話ができるんですけれども、都市計画のマスタープランとしての位置づけとしてということをもうちょっと事務局は意識をして、あえて入れていないというような判断ではないかなと思うんですが。

水越委員 ただ、私はこの「人やまちの「品」」というところで、そこはかたなく漂っているのではないかという気はするんですね。だから、全く入っていないというわけじゃないのかなと。

大内委員 やっぱりそういうふうにとらえ方が各人で違ってくるということは、やっぱり逆に言えば、そういうことは明らかに意識するような何か仕掛けが要るんじゃないかなとは思いますが。

要するに、品があるから、やっぱり芸術・文化も一応それはあるんだよ、背景に。思うのと思わないのと、やっぱり人それぞれで違うと思うんですね。だから、言葉として表に出して意識するようなキャッチフレーズをマスタープランの中でつくっていくという、そういう意識確認が要るんじゃないかという気がします。

特に、私どもで指摘されたのは、特に西宮の場合は海外からプレーヤーがいらしているということが言葉として出てきましたので、そこもいろんなところで、そういう何とかホール、何とかホールと全国であると思うんですけれども、音楽監督さんがおられて、海外からもそれなりのレベルのプレーヤーが来られているというのは、地方都市としてはかなりユニークなのかなというふうに私はイメージとして思いますけれども。ちょっとそこら辺。

久委員長 芸文センターは、佐渡裕さんですか、世界的な指揮者が全体のマネジメントをしていますので、そのあたりは世界のトップクラスのセンターになっているはずなんですね。

ただ、先ほどお話が出たように、土地区画整理事業をするときからもう既に芸文センターを想定をし、恐らくその芸文センターが来ることで、都市のデザインとか区画整理の街区割なんかもされているわけですね。そういうことで言うと、その文化芸術がまちづくりに非常に大きく貢献をしているというようなことなんですね。

さらに、その次に、では、もう既にでき上がっている芸文センターを中心として、あるいは芸文センターだけではなくて、文化・芸術を想定をしたときに、さらには先ほど大内さんがおっしゃったように、外国からたくさんの有名なプレーヤーが来られたとしたときに都市計画はどうなるんでしょうかというところをもう少し議論したいんですよ。そうすると、言葉が理念になるのか将来像になるのか、将来像の説明になるのかということが見えてくると思うんですね。

田中委員 いいですか。

私、今の久先生の言葉は本当に大事だと思うんですけれども、その芸文とかいろん

なところにお客さんが来たり住んでいて、一番欠けるのは、その都市計画をやったところはいいかもしれませんが、すぐ隣にいろいろそれを阻害するものがやっぱり今あるわけですよ。

西宮市で、私、一番欠けているのは、それはいいんだけど、その先の美しさという面が全体を見たときに阻害されているんじゃないかと。だから、その美しさというものについて、要するにもう少し西宮市の理念としてまちが美しくないとだめだということを入れないという気がするんですよ。

藤本委員 提案ですけれども、今の議論を伺っておりまして、理念の中でちょっと私が分類してみたら、一番上の行がありますね。ここで、「閑静な住宅環境や恵まれた文化」とありますね。閑静な住宅環境というのは、非常にだれも異論がないところだと思うんですね。その次の言葉で、「文化・教育環境によって、他都市とは一味違う存在感」、ちょっとあいまいな感じがするんですよ、そういう意味からすると。

文化・教育環境を、今おっしゃったような、はぐくむような中心がいいと。その中心もサポートできるような周りの環境もよくするという意味では、ここを「文化・教育環境をはぐくむ」というような言葉遣いにしていくと、今おっしゃったようなことが明確に入るのかなというふうにちょっと思ったんですけれども。

松本（康）委員 だから、もともとあった、与えられたみたいなイメージではなくて。

藤本委員 ええ、今もうあるわけですよ。芸文センターがあって、いろんな文化施設があって、大学もあって、だからそれはあると。そこをもっと育てていく周辺の環境をつくってほしいという話かなと捉えて。

田中委員 今後の話ですよ、もちろん。今はどうも中途半端で終わってしまって、その場所はいいけれども、例えば関学があったり武庫川女子大学があったり、そこはいいんですけれども、その周りにそれに似つかわしくないものができつつあると、やはり環境としては阻害されると。それを今後やめていくか、改造していくか、

調和させていく努力が必要じゃないかと、それが市の目標の一つにあってもいいじゃないかという私の考えです。

大内委員 じゃあ一つつけ加えて、はぐくんで、やっぱり何年先か、百年先と言っても別にいいんでしょうけれども、受け継ぐということが要るのかなと思いますね。はぐくんで受け継いでいくというのが、私たちがここに集まって議論した。将来的に、あの人たち何をやったんだろうねと言われたときに、実はいいものを残してくれたねというふうにやっぱり言ってほしいですよ。やっぱり、せっかくここでかなりの時間を割いて議論をしているわけですから、受け継ぎも必要かなというふうに思います。

田中委員 確かにおっしゃるように、20年、30年、50年後に、西宮はきれいなまちだなと言われると、これは私たちが実際にこの都市計画マスタープランをつくったときの誇りにもなるぐらいの強い言葉だと思うんですよ、きれいなまちだなと言われるとね。

久委員長 ちょっと今、下の言葉の議論になっちゃっているんですけど、まずキャッチフレーズを決めませんか。

大内委員 それで、私、もう一つ質問したかったんです。要するに、テクニクとして民主論的に、キャッチフレーズは、せんだってワークショップでやったように、1・2ワードで決めてしまう言葉なのか、それともある程度フレーズが長くてもいいのかという、長ければいろんなことなりを込められますので、短いと、非常に抽象的にかなり煮詰めた言葉で非常に難しくなるんですけども、その辺はどうなんでしょう、技術論的に。

久委員長 どうなんでしょうというか、それは決め方次第だと思っているんです。長ければ覚えられません。

水越委員 覚えられませんね、絶対覚えられません。覚えてもらえません。これは、多分、広告代理店のセオリーじゃないかと思います。私、その業界じゃないで

すけれども。

久委員長 そらんじられないような理念というのはどうなのというように思いますよね。

田中委員 それで、結論から先に言わせてもらおうと、私も先週から考えて、1週間いろいろ考えてみた結果、これは皆さん異論はあろうと思うんですけれども、私の今考えたキャッチフレーズとして、この市民代表の暮らしとまちのビジョンの中とか、市の今の意見とかをいろいろ考えて、キーワードになるものをいろいろ探してみても、例えば歴史とか安らぎとか楽しさとか安全、人育てのまちとか、まち育て、こういうものを一つの言葉にしてしまっても、私が今、実際に考えたことは、西宮市が優しさにあふれて緑豊かな美しいまちと、こういう簡単なワードで表現しておいて、それを何かにつけて、例えば市の作業をするにしても、建築物をするにしても、それが人々に対して優しいか、例えば老人に優しいかとか、子供に優しいか、笑顔が出ているかという、そういうものについては、全部、環境に対しても、自然に対しても、生き物に対しても、実際にそれをする事自体が優しいかという、その優しさという意味と、それからそれに対して緑豊かなということは、どうしても私は今、西宮市の南部地区については自然を戻そうという気はありません。

なぜかと言うと、自然というのと緑というのは違いまして、自然が何十年もたった、緑が何十年もたってどんどん大きくなれば自然になるかもしれませんがけれども、今、住宅地の中で自然をつくろうとしても実際には無理なので、緑豊かなという形をとらせていただいて、その緑が将来、自然になってくれればいいなという気はしますけれども、例えば山間部とか北部の自然が多いというのと緑豊かなというのがひっついてますけれども、そして先ほど言いましたような美しいまちという形を三つの言葉で、フレーズでまとめれば、今、私が2週間、必死になって考えた中の一つですので、それをちょっと議論していただけたらなと思います。

大内委員 もう一回ちょっと、案の5ということですね。ゆっくり読んでいた

だいていいですか。

田中委員 「優しさにあふれ、緑豊かな美しいまち」と。優しさという言葉には、人に優しいとか、老人に優しいとか、子供に優しい、子供が笑顔になれるまちとか、それから環境に優しいという、そして子供たちすべてに優しい心をつくっていくという、そういうふうなことで優しいという意味と、それからもう一つ言いましたように、緑がとにかく豊かなまちでないと、これは例えばエコの問題も含めて、少々内水をしたところで木が茂ったまちほど、私は今、甲陽園に住んでいますけれども、やはり1度か2度違うわけですね。そのぐらいの緑は影響がありますので、それをし、例えば南北問題なんかは確かにあるんですけども、キャッチフレーズに何もかも入れるというのは不可能なので、そういうことを今考えて、2週間の結論です。

久委員長 いかがでしょうか。案の5というのが追加されたということで。

森下委員 2班のほうでは、以前から2班として出ていたのは、「恵みあふれる」という言葉なんですけど、今、田中さんがおっしゃった自然であるとか、緑であるとか、非常に班の中でも議論があったのはワークショップでありました。

それで、先週集まった中で、こういった形で今動いているよという報告とともに、今あった4案についてお話しさせていただいた中で、まず緑であるとか自然であるとか、そういったことについて今話していることというのは、きょう実は御用意していただいていますけれども、この地区別の構想の中で、当然、一番上に出ている地区の目標のところ、鳴尾であるとか南地区であるとかというところには、甲東であるとか、北であるような、自然環境の保全というのはいないんです。

基本的に、今言われました、田中さんがおっしゃっている、緑であったり、自然であったり、あふれるまちというのは、恐らくそういったゾーンから言うと、そういう地域だと思います。それを総称して西宮という地域ではないかと。そうなってくると、逆に僕らが話の中で出たのは、そういった言葉がうまく何となくふわっと形的に出てきたのは、やっぱり「品」という言葉は化けたかなと。

その「品」という言葉には、先ほどの芸術であったり、文化であったり、歴史であったりということも僕は説明した中では、何となくわかるような気がするような感触でした。

ただ、今言っていますように、キャッチコピーの中にどうしても緑が欲しいであるとか、自然を入れてくれであるとかという話の中では、確かにまだ2班の中でもまだわからなくふわっとしていると。

ですから、この「品」が出た経緯というのは、実際、ちらっと久先生の話の中でもあったけれども、恐らく僕が思っている今回の品ということについて、若干自分なりに、田中さんも2週間勉強されたと思いますし、僕も2週間勉強した中で、マトリックスをつくったと、自分で。やっぱり、西宮の品というのは何だろうかと、その辺のところはちょっと後ほど話もしますけれども、一たんその辺でまとめました。

松本（康）委員 きょうは5班で3人でちょっと情報交換というか、意見交換をしたんですけれども、結構、その「品（ひん）」という言葉を使うと、「芦屋違うんですか」と、真っ先に返されてしまって、ああ、そうかと思ってという話が出ました。

あと、さっきの緑の話なんですけれども、私もゾーンという森下さんがおっしゃる考え方も一理あるのかなと思って、ちょっときょう、質問を投げかけてきたんですね。「街路樹をもっと充実させてほしいな」という意見を寄せたいいただいた方とかに、「いやいや、ちょっと意地悪な聞き方ですけども、そんなに自然がよかったらさくらやまなみバスに乗って船坂に行きはったらいいん違いますと言われたら、どう返します」と聞いたんですよ。そしたら、「いや、そういうことじゃない」と、「やっぱり年がいてそんなにホイホイどこでも行けるわけじゃないから、やっぱり移動しやすい場所、歩いていけるような場所に、そういう集ったりリフレッシュできる場所としての緑が欲しいという意味なんだ」というのを言われて、そういうことですかという話だったんで、決して緑は北に押し込めて、南は便利な都会というようなイメージを持たれているんじゃないんだなというのは、意見交換する中では出てきました。

田中委員 そうですね、お客さんは結局、私もいろいろちょっと聞いてみたら、結局、今のことがやっぱり、例えば本当に木が全然ないようなまちと緑の木の茂ったまちとどっちが好きですかとなったら、全部、緑が茂ったほうが好きですという答えが出てくると思うんですけども、だからそれはやっぱりなぜかと言うと、結局、安らぎという形をとって、そして緑が多いということは、最初に例えば西宮へ帰ってきたらほっとするなという、この前、先生がおっしゃっていましたが、緑が多いなというふうに感じるんですね。視覚から見る、私は写真をやっていますので、視覚から見る美しさというのも含めて、目で見て感じるというのは非常に大切なもので、ですからその中で緑があるかないかではえらい違いなものですから、その辺のことをちょっと説明すれば、緑の多さが多いほどいいなということ。

例えば、写真に撮ったときに、ぱっと撮ったときに、自然の写真を撮るんですけども、緑がない写真と緑がある写真と、緑のパーセントと言うんですけども、どのくらい写真の画面の中に緑が映っているかによって、このまちはちょっと緑が少ないとか、多いなとかというのが、私自身で、自分でそれは感じていることなので、ですからそれは皆さんも実際に木の多い、少ない、確かに私さっき言いましたように、自然を戻そうということはちょっと無理な話なので、緑が多ければ、将来は自然に戻っていくかもしれないということで、例えば街路樹だとか、家に木を植えるとか、そういうことをどんどんどんどん進めていって、エコを含めて進めないかなというふうな基本理念ですので、その辺を考えたわけです。

大内委員 質問をちょっとまた戻しますけれども、先ほど久先生がおっしゃった、田中さんのおっしゃった説明に対して「案5」とおっしゃったと思ったんですけども、私は田中さんのおっしゃったのは、こういう基本理念から来るキャッチフレーズそのものもおっしゃったんじゃないかと思うんですが、基本理念の案というところまえ方なのか。

久委員長 案1、案2、案3、案4で、田中さんがきょう御提示いただいた案

が案5。

田中委員 5でも何でもいいんですけれども、私は実際にキャッチフレーズとして出したつもりなんですけれども。

大内委員 結局、そこからキャッチフレーズそのものかなと思って。

久委員長 いや、これがキャッチフレーズですよ。この四つが今出ている。

大内委員 いや、理念と書いてあるから、これはキャッチフレーズなんですね。キャッチフレーズとは思わなかったんですけれども、どうなんですか。

瀬川委員 そこのとらえ方なんですよ。

大内委員 だから、さっきその言葉というふうに言ったんです、私の疑問。

水越委員 ああ、なるほどね。そうですね、前はキャッチフレーズと書いていて、今回は基本理念と書いていますよね。

大内委員 しかも、三宅先生が確か、きょうは御欠席ですけれども、大和言葉がいいよねという話をされたと思ったんで、それで私ずっと、私も2週間、非常に悩んで、それなりのワードはつくりましたけれども、たたき台としては御提示はできませんけれども。

田中委員 確かに、まちの将来像という言葉の中にいろんな言葉ができていますよね、この丸印のついた部分、その辺も以前からずっと考えてみて、結局、何を最後にやるのか、品よくとかという話も、結局、品のいい人が、例えばガミガミガミガミしていらついで文句ばかり言う人は品がいいとは言いませんよね。ですから、その辺の品も含めて、要するに優しさがないとそういうものは育たないという考えも私もしまして、その優しさというのを全部にひっくるめてしまおうということをつくったんですよね。

松村委員 専門家の松村暢彦ではなくて、住民になるかもしれない松村暢彦として発言するんですけれども、僕はいいなと思ったのは、このワークショップの5班のです。七つの「えん」がいいなと思ってたんです、前々から。

これ何やねんと聞かれたら、何やよう答えられへんのやけどという中で、この七つの「えん」ではぐくむ西宮みたいな話というのは、僕が住民だったと仮定すると、そこから先に自分から一步出ようとするような気がするんですね。

それがよくある言葉であると、「ああ、そうね」という話になってしまいそうな気がして、この都市計画マスタープランを通じてどこを目指すのかと言ったときに、一つは、きれいな施設をつくっていきましょうとか、そういう話もあるんでしょうけれども、先ほど市役所さんのほうから御説明いただいたように、かなりの部分はそろってきていると。交通問題で言うと、こんなに恵まれた都市計画マスタープランのところは初めてです、私は。公共交通の利用者がふえ続けて、しかもバスの利用者もふえ続けていくという、僕の役割は全くないんと違うかなと思うような、初めてなんですけれども、こういうような状況の中で考えていったときに、やはりこれから期待するというのは、これだけそろってきたようなものに対して、市民が一步前に出ている使い倒してくれて、それがまちとしてよくなっていくというようなことなんじゃないかなと思うんですね。

先ほどの緑の話もそうなんですけれども、私が小さいころ、神戸市の垂水というところに住んでいたんですけれども、その長屋のところの前に街路樹が植わっていて、何の気なしにというわけじゃないですけれども、基本的にはその自治会が全部管理しているような街路樹で、秋過ぎになってきたら落ち葉を集めて、そこでたき火をして、焼き芋を焼いて食べた。そういうのが僕の緑の経験で、緑そのもののももちろんすばらしいんですけれども、緑を通じて近所の人といろいろ触れ合ったというところが僕の財産なんだなというように感じているんですね。

これからのことを考えると、多分、これからも西宮はたくさんの住民が来るとは思うんですけれども、その人たちに単に便利なものだけを享受するというフリーライダー的なものじゃなくて、参加してほしい。前から住んではる人も参加してほしいと思うと、何か一步ぼんと前に出るようなキャッチフレーズだと、可能性があるかなとい

うような気がしたので、ただワークショップでこの一つの非常に目立つやつをとるというのは、なかなか日本の意思決定の中では難しいですね。

日本の意思決定は、何となく足して平均値をとるみたいなやつが常套手段なので、そういう意味では、きょうの参加者の方々が班に帰ったときに、何で5班のキャッチフレーズになったんだと、もっと頑張らんかいなと言われそうな気がして、それはそれでまたちょっとどうかなという気はあるんですけども、さっき言ったみたいに、僕が新しく西宮に入ってきて、もし万が一そういうのを目にしたときに、おっと思うようなキャッチフレーズがあったので、僕はすごく引かれたんですけどもね。

大内委員 松村さんのおっしゃった、緑の下で云々、落ち葉で芋を焼いてという話は、そのイメージは先般の会議、先生、ちょうど御欠席だったと思うんですけども、瀬川さんからちょっと指摘が出ていたことでもあるんですけども、4班の一番最後のまとめのところに、女性の方が絵本か何かを描いていらっしゃるので、その自分の得意な絵で描いていただいて、そこに住む人の輪ができて集まっている絵があるんですよ。やっぱり、そのイメージを皆さんやっぱり、時代背景もあって、人のつながりも少なくなっているからということで、逆にそういうものを求めているということの象徴として書いてあるわけですね。だから、今、そういうことをおっしゃっているのは、多分、一緒だと思うんです。

それで、そういうことを議論したときに、私はじゃあ「集う」という言葉を出したんですよ、班内で。そしたら、いやいや、集うというのは、非常に静的であって、やはり西宮の歴史をたどると、街道のまちで、人が行き交っていたんだと。だから、芸文で海外からの人が行き交っているんだから、行き交うという言葉は動的な部分としてとらまえていいんじゃないかと、そういう議論も出たんですね。

だから、そうして考えると、森下さんのさっき、自分の地区には自然というものがない。田中さんの言葉をとらまえると、それは何も自然復活じゃないんだと。緑は、多分、私の理解では、街路樹は、当然、市の計画で公園・緑という大きな計画があっ

て、本数が何本とか面積がどうかと書いている計画がありますよね。

だから、森下さんの地区の中でも、いわゆる緑はあって、じゃあその街路樹を一体的に見たときにどういう管理をされているかと、その緑をどうしたいということがやっぱりあり得ると思うんですね。そうすると、緑の形が平面的にならずに、もうちょっと立体的になると、やっぱり樹木なのかなと思いますよね。そうすると、今の緑に人が集うということは、緑の立体を見ると、やっぱり樹木だから、どういうことを選ぶかなと、大分、私、悩んだんですね、この2週間。

じゃあ、いいでしょうか。私、異論があるということで、たたき台として出させていただきます。

つまり、この理念じゃなくて、キャッチフレーズの中で出てくる言葉ということで思っています。長くなりますけれども、だからさっき聞いたんですけれども。どこかにあるかもしれませんが、「木漏れ日に老いも若き集い来る」です。動きがあるということで。過客、芭蕉も奥の細道に出ていて、百代の過客にしてと、「過客と芸文華やぐ」、これはちょっとつけ足し的なんですけれども、やっぱり先輩に敬意を払わないといけないから、「生一本のまち」と、こうしたんですけれども。

久委員長 和歌ですね。

大内委員 要するに、大和言葉ということがあったので、だから私ども、キャッチフレーズと理念をあえて分けて、異論というか、ちょっと議論を差し挟んだんですけれども。

瀬川委員 もう一回済みません。

大内委員 書いていただいたほうが。

事務局 平仮名ですか。

大内委員 漢字で木漏れ日。

木漏れ日に老いも若きも集い来る過客と芸文華やぐ生一本のまち。純粹とか、やっぱり品があるので、そういう意味で、あと西宮です。これは、夕べ結論に達しました。

久委員長 案の6ということでよろしいですか。

大内委員 緑をどういうふうに入れるかなと考えたんですが。

田中委員 いっぱい言葉があり過ぎて、それをいかに、確かにさっきみたいに覚えられないと意味がないので。

大内委員 緑と言っちゃうと、矮小化して、すぐ草花になってしまって、花を植えましょうみたいな話になるので、ずっと以前は、緑の壁を塗ったり、道路を緑にしたりしましたよね。

久委員長 このあたりで言うと、もうコピーライティングの能力だと思うんですけども、方向性をきちんとイメージできて、なおかつ言葉に含まれた意味が膨らむような言葉を見つけていくということですね。

松本（康）委員 コピーライターだったら、いろいろと考えてくれはる。

大内委員 田中さんのあれは、やさしさというのは。

田中委員 簡易のやさしさではなくて、優雅の優のほうです。

久委員長 先ほど松村先生が5班の話をしていただいたんですけども、5班は私のほうでワークショップの最終回のもう一つ前のところでアドバイスをさせてもらって、「えん」という、これは平仮名で書いたら幾つかの漢字が当てはまりますよねという話をさせてもらったと思うんですね。これは一つのやり方なんですよ。

それはアイデアとしてあったのは、交野市の前の総合計画ですけども、「わ」を大切にするというのがあったんですね。「わ」という言葉は、和やかな「和」、それから輪っかの「輪」、環境の「環」、それから私の「私」、いろんな意味があるんですね。そうすると、先ほど田中さんがおっしゃった、やさしさというのを大和の「和」でいけますでしょう、環境を意識するというのは「環」でいけますよね。それから、みんな人がつながるといのは輪っかの「輪」でいけますよね。というようなことがあったんですね。

このように、一つの言葉なんだけれども、その言葉にぶら下がる漢字を幾つかやる

ことによって七つの意味をもたらしているというのが5班のキャッチフレーズ。それが一つのテクニックです。言葉は一つなんだけれども、漢字が七つあるということで、七つの意味を持たせているというのも一つの手なんですね。

田中委員 何かなぞなキャッチフレーズですよ。逆に、何か「なんやねん」みたいな。

久委員長 それは単なるテクニックですよ。テクニックなんだけれども、それが一つの言葉でたくさんの意味を含ませるという、ある意味での理念、キャッチフレーズの一つの方向性。

田中委員 それと、先生、もう一つ、このキャッチフレーズというのは、総合計画の基本計画がありますよね。それに全部かぶさってこないと意味がないんですよ。

久委員長 そうですね。だから、前回というか、今の基本的な方針、都市マスは、ある意味ではずるいですよ。

田中委員 これ、いっぱい読んでも、わかること一つも書いてないので。

久委員長 この都市計画マスタープランで理念をつくるんじゃなくて、総合計画の理念をそのまま理念にしましょうという理念なんです。

瀬川委員 そうなんですよ。だから、タイミングのずれがあるんですけども、前回のやり方はそうなっているわけですね。

今回、我々がやるのは、基本計画で出されたことを追認する場面なのか、新たなものをつくるのかというところですよ。やっぱり、新たなものをつくるというのが基本ですよ。

久委員長 新たなものというよりも、先ほど御説明させていただきましたように、大きなところは総合計画で決めているわけですね。それを受けた都市計画の基本理念をつくりたい。

田中委員 この本の、決まっているんですかね、計画としては。これをそのま

ますれば何も要らんわけですけれども、それを結局、市がこれをするのに理念がないんですよね。こうしたい、ああしたいということばかりで、理念がどこにもないんですよね。こうしたい、ああしたいとかは書いてあるんですけれども、だけれどもそれにかぶさっていく言葉がないと意味がないなと思っていたんですけれども。

久委員長 会社にお勤めの方はわかると思うんです。会社にも社是というのがありますよね。社是に相当するものだと思うんです。一言で方向性を示していることなんですね。それは、もう毎朝、朝礼で繰り返し述べるという、だから決まったら、これから西宮市民とか、西宮市都市計画課の職員は毎日、毎日、これを復唱すると。

田中委員 しないとだめですよ。

久委員長 そういう意味かなと思いますけれども。

瀬川委員 そういう意味では、社是というのは企業の中の社是だとしたら、総合計画があって、都市計画があって、都市計画の中に理念とか、社是を論議しているんですけれども、その上である総合計画に理念がないかという話になると、非常にややこしいんですよ。

田中委員 僕の言うのは、総合計画にかぶさってくるもの、その総合計画というのは、ああしたい、こうしたいをいっぱい書いてあるんですけれども、それが一つの理念にまとまって書いているわけじゃなしに、こうしたい、ああしたいと箇条書きでいっぱいあるんですけれども、その一番上になる言葉が抜けているんじゃないかなということで、久先生のおっしゃったマスタープランの言葉が非常に重要だなという気がしたんですけれども。

松本（康）委員 この「ふれあい、感動、文教住宅都市 西宮」というのがキーワードなんでしょうけれども、これは田中さんの的に見ると、これはやりたいことを書いているだけだと。

田中委員 そう思います。

松本（康）委員 そうということですね。

瀬川委員 そういうとらえ方ですか。

僕は、ここでは基本目標とかに一応なっていますけれども、これが理念に相当することかなと理解したんですけれどもね。

久委員長 すごく大きさに言うと、西宮市民たる生活をする上で人生訓になるような言葉じゃないといけないわけですね。そうじゃないと、みんなが共有したビジョンということにならない。

今までは、市役所とか、一部、審議会委員とかが決めましたみたいな話になるんですけども、そうじゃなくて、今回、せっかくワークショップをしたわけですよ。少なくとも、その参加者の方々と行政で今議論されているメンバーさんは、ある一定の共有した理念・ビジョンみたいなものにしていきたいなと思っているわけです。

だから、これを受けて、本当は自分たちの生活訓とか人生訓になっていって、日々の暮らしが展開されていくと、それなりのまちができ上がってくると、そんなものが理想なんですけれどもね。

室崎委員 私も住民になるかもしれないという立場で、今まで聞いていた感想に近いようなことなんですけれども、こういうさっきのキーワードというか、何か基本理念みたいなものをつくるときに、言葉にしたときに結構どこのまちでも一緒やなというようなものになってしまうなという思いがありまして、そういう意味では、例えば先ほどの5班のものだったりとか、やっぱり何か西宮だから出てきた、そういうものなんだなというのがわかると、何かやはりさっきの、もちろん優しさだったり、そういう緑であったりとかというのももちろん大事なんですけれども、それはでもそれだけを見て西宮のものだとは多分わからないかもしれないなと思ったりすると、何かそういうような要素が入っているというのも、私がもしも西宮に住んでいたとしたら、何か西宮だからそういうものをつくったんだなと思えるかなというふうに感じるのと、あとは緑の話、先ほども出ていたんですけれども、やっぱりずっと話を聞いていると、もちろん手段としては緑なんですけれども、最終的には緑の中でつながって

いったりとか、その中で楽しくとか、豊かに生きられたりとかというところのための要素というか、そういう環境をつくるものとして緑がいいとおっしゃっていると、もっと上の段階では、緑ではなくて、それがあある環境の上でできる生活みたいな暮らし方とかというところがもしかして言葉で出てきたら、もっと全部包み込めるような。

田中委員 3班で考えたことは、南北を緑で、山海を緑でつなぐということがありまして、山間部と海を、今、道路があって、例えば東西道路は結構あるんですけども、南北道路は非常に少ないのと、それをもっとふやしていこうと、南北の交流をふやそうと、東西だけじゃなしに。それをつくるのに、例えば自動車道をうんとつくろうという話じゃなしに、歩いてとか自転車でいけるような道をしよう。それは、例えば本当に緑のない、街路樹のないところを自転車で行くのか、それとも街路樹があって、夏、日陰を自転車で行くのか、その場で考えようということなんですね。緑をふやそうということ考えたのは、南北間を含めて考えたわけですよ。

室崎委員 お伺いしていると、やっぱり気持ちよくつながったりとか、それは土地として南北もつながるし、人もつながるしというようなことだとすると、もしも西宮の今現在住んでいる方がやっぱり緑が基本理念の中に要るんだということであればまたあれなんですけれども、それは何かもしかしたらこのまちの将来像とかというところにしっかり書かれていても、十分伝わってくると思うんですけれどもね。何でつなごうとしているのかみたいなところというのは、何か十分イメージができるというか、そこに入っていないから、じゃあそうならないかということ、そういうことはないような気はするんですけれどもね。

久委員長 ちょっと話が、こういうときは派生したほうがいいと思いますけれども、私のお隣は美登利さんなんですけれども、水越さんの美登利は、美しく登る利なんですよね。だから、田中さんがおっしゃっている美しいという字も入っているわけです。利便性の利も入っているわけです。登るをどう解釈するか、南北を山に登る

と考えたら、この美登利を使えば、美登利でつくる西宮という話になってくるんですね。単なる植物の緑だけでなく、広がってくるんですよ、言葉として。

松本（康）委員 でも、私も一回、前回何かお尋ねしたと思うんですけども、緑化、緑というのは、手段なのか、目的なのか、私もいまだに答えを持っていないんですけども、手段と違うかという話もありますよね。

室崎委員 手段というか、何かそれがあつたら、じゃあすべて生活がいいのかと言ったら、そうではなくて、それもあつた上でのどんな暮らしというところがまたさらにその上にあるのかなというふうに思うので、何かそこをそこまで、だからそれだけがあつたらいいみたいなことでもないのかなと思うんです。

森下委員 2班でもその話があつて、結局、今の話、緑であつたり自然であることに対しては、皆さん、共有することでわかっていると。今、室崎さんがおっしゃった、それがあつて確かにつながるかもわからないんですけども、じゃあ生活環境としてそうなのというのがわからない。

この間も話の中で出ていたのは、住みたいまちランキングでも挙がっている中では、住環境であつたり商業環境であつたり、そういった生活環境のほうに振りかえたときに、どうなんだろう。先ほど前段で申し上げた、品が出てきた話の中で、実は昨日、ちょっと仕事のこともあつたので、姫路・加古川のほうに行つたんです。東海道沿線の中で明石を越えたぐらいから、田園風景があつて、山があつて、自然があつて、海があるわけですね。あの方々が、本当にそこに暮らしている方々が、緑いっぱい、自然あふれて、確かにキャッチとしてはいいんですけども、本当にそれで西宮と比べたときにどうなんだと。

品の話に戻ると、これもいろいろ議論の中で悩んだんですが、百貨店が市内に、阪急百貨店と阪神百貨店が二つあるんです。実は阪急ガーデンズのコンセプトは、上質な日常を募る充実の品ぞろえの幅広い世代の客層なんです。つまり、上質ということをキャッチにされているんです。

西宮の阪神百貨店、そこもやっぱり百貨店としての品ということはあるんですよ。

次に、甲子園のららぽーとは逆に言えば、百貨店はないんだけど、イトーヨーカドーという東京から進出してきたGMSがあって、それを伴った商業施設があるんだけど、逆にキッザニアができたことで、ファミリー向けに変わってきているんですよ。

実は、ここからちょっと非常にディープな話になるんですが、花屋さんがあるんですが、青山フラワーマーケットというおしゃれな花屋さんがあるんです。これは、阪急の入り口のところにあります、ガーデンズの。ららぽーとも実は進出していましたが、ついこの間、退店しました。それは何故か。基本的には、花という、毎日買う方もいらっしゃるかもわかりませんが、そういった品とか、そういうものに対する意識がやっぱり南側の方々は、イトーヨーカドーのお花屋さんでいいわけですが、近所のお花屋さんでいいわけですが。だけれども、北側にお住まいの方々はガーデンズの青山フラワーマーケットでちょっと小じゃれた同じ300円の花でも買って帰ると。それは何かと言ったら、地域性だと思うんです。

ですから、さっきから言われている、緑であったり、自然であったりとかという話は、先ほどから田中さんもおっしゃっていたように、僕の生まれた中で緑がつながって行って、周りがそれでというのはないんです、実体験として。だから、わからない。

ただ、この間の写真を出されていた、武庫川上空のあの景観というのは僕は非常に美しいことだと思うし、街路樹とか緑が大切だと思うんですが、それはそれで一つ完結した中で、それは今度、地域性をしたときには、北側の導入のときには、恐らくそういう緑であったり自然であったというのが大切かなと。

僕ら南側と言ったら失礼ですけども、下町に住んでいるものが、それも大事だけれども、キャッチとしたときには、余りぴんとかないなと。どっちか言うと、今言った、店であるとか、つながりとか、そういうことかなというのは2班の中でも話が出ました。

だから、緑であったり、自然であったりとか、そういったことに対して否定するつもりはないんだけど、総括しているキャッチとしては、さっき言った姫路とか、明石とか、ああいうところのほうが当然自然も多いし、田んぼもいっぱいあるし、田園風景もあると思うんです。

あの方々が本当にそれで満足している、自然の中で「よかったね」と暮らしているかと言えば、もしかしたら仕事に行く方々は、夜、遅くなったら、真っ黒けの中に帰ってとか、違うなど。その基軸が、何かいつもまた振り返している話なんで、この前のワークショップでも、ここだけで話をしているのかなと思いつつ、わかんないんですけれどもね。

久委員長 それと、もう一つ、資料の3を用意していただいているんですけれども、先ほど森下さんから出た西宮らしさということで言いますと、この資料3の右側の阪神地域のところの目標が、「環境と調和し、伝統ある市民文化に支えられた活力あふれる都市づくり」なんですね。これもどこでもある言葉なんですけれども、環境を大切に、市民文化・伝統・活力、何でも突っ込んだら、こうなっちゃうんですよ。どこの市でもそうですね。

これ、阪神地域なのかなというところがあるんですけれども、市民文化というのが、恐らく一つ、阪神地域をあらわす言葉ではないかなと思うんですけれども、これと、ある意味、これも受けないといけないし、これに合わせた西宮らしさみたいなものも出してこないといけないと思うんですね。

だから、芦屋じゃない、尼崎でもない、伊丹でも、宝塚でもない、さあ西宮に住み暮らし都市をつくっていくときの基本理念は何でしょうかということなんですね。

森下さんの今のお話で言うと、南の人には、ちょっと今出ている言葉では違うぞと、南の人間は合わないぞという御指摘だったと思うんですけれども。

瀬川委員 上位計画としての基本計画がありますよね。この中、六つありますけれども、この上に将来のまちのイメージの一つに、「水と緑ゆたかな美しいまち」

と、もう既に入っているよというとらえ方もできますよね。

田中委員 入っているでしょう。

瀬川委員 ここに入っていますよね、ここにね。

それで、ここの都市計画を決めるときには、先ほどからやっぱり皆さんが言っているように、どこのまちでもつながるものではなくて、やっぱり西宮らしさ、よそと違う個性というか、西宮というのを何か感じられるものにしたいなと思うんですよね。

室崎さんがおっしゃったようなことかと思うんですけれども、そういう意味では、5班の七つの「宮っ子の7えん」という、そういうことがあるでしょうし、6班では、宮水にひっかけて「みやミズム」ということにしたんですけれども、イズムがちょっと古いというか、危険な言葉というイメージがちょっとあるので、ここはちょっと使えるのか、わかりませんが、みやミズムは、そこにありますように、澄み切った心、地場を育てる、つなげるとか、大切にするとか、どちらかと言うと、自然とかなんかよりも生き方というか、人とのつながり方というか、そういったことを「みやミズム」と表現しているんですよね。

だから、今ちょっと言いたいのは、上位概念としての総合計画にあることは、もう書かれていることはそこに任せて、都市計画のところでは、少し西宮らしさが感じられる表現を考えたらどうかなと思います。

大内委員 だから、その理想像をフレーズ化するということの作業でしょう、現在の意味は。

それはもう一度繰り返しますけれども、三宅先生は大和言葉がいいよねということ締めくくったんだから、その言葉をちょっと、理念のところを何遍も右往左往していますけれども、それはもういいんじゃないんですか。要は、ここの場は、やっぱりフレーズを探すということじゃないかなと思うんですけれども。でないと、何遍も同じことを議論、ぐるぐるぐるぐる堂々めぐりになると思いますけれども。

松本（康）委員 済みません、さっきの西宮らしいというので、ちょっとだけ済みません、脱線させてください。

西宮らしさは何かなと思って、いろいろ皆さんとメール等で議論させていただいて、大阪・神戸の会社勤めの人とかが住んでいるというところなんだなと思ってたんですけども、さっきの森下さんの話を聞くと、多分、北部にお住まいの方はそんなことと思っていないかもしれないですよ。文教住宅都市と言われても、「そうなんですか」みたいな思い出してきて、文教住宅都市でもひょっとするとありかもな、なんて。

田中委員 文教地区と言ったら、甲東園のところ、あそこだけですよね、本来は、文教地区としてあるのはね。

大内委員 各論の話でね。だから、例えば文教都市と理念をうたい、あるいはフレーズ化しても、そういうふうにしたら、各地域は、じゃあどういう割り振りをしていくかという各論の議論の話であって、それを一々ここで言ったら、切りがないですよ、やっぱり。どこかでフレーズをつくるという、やっぱりこれはビジョンをつくるということで、この3回の最後の回になるんだろうと思いますので、そこへ絞っていかないと、切りがないと思いますけれども。

松本（康）委員 僕が言いたかったのは、全市をカバーするというのはなかなか難しいことだなと思って。

大内委員 ビジョンが決まって、フレーズが決まったら、それに基づいてそれぞれの地域計画はどういうふうに具体的なプランを立てるかというふうに落とし込んでいくはずなのであって、それを今議論しているわけじゃないと思いますよ。

水越委員 久先生、これは確認ですけれども、ここできょう、基本理念（案）と言っている言葉と、前回、キャッチフレーズと言った言葉は同じ意味ですか。

大内委員 それを私はさっきから質問しているんです。

水越委員 同じ意味ですよという確認です。

大内委員　　これは議論でいくしか、A案賛成の方、B案賛成の方でやるしかもうないじゃないかという、そんな話じゃないんじゃないかと思ったんですけれども。

水越委員　　そうじゃなくて、これから選ぶということではなくて、要は、前回、キャッチフレーズを決めましょうと言っていたことと、今回、基本理念を話しているというのは同じことだということですよ。

大内委員　　それをベースにしてということだったら理解しますけれども、これが既にキャッチフレーズの案だというふうにさっき答えがあったように思ったから、変だなと。

水越委員　　案は案ですよ。そして、また別の案としてあれが出てきたわけで、だから同じことを言っているんだと。

久委員長　　もう大和言葉は入っていますか、そうしたら。

大和言葉でいきましょうという確認はなかったですか。

大内委員　　それを言っちゃったらあれだけど、わざわざ三宅先生がそういうふうにおっしゃられたから、そういう意味でキャッチフレーズをいろいろ悩んだわけです、この2週間。

水越委員　　だから、それで一つの案をつくっていただいたから、それを議論したらいいと。

大内委員　　だから、確認しているのは、案1、案2、案3、案4と出てきちゃったけれども、これが本当にキャッチフレーズかと言ったら、そうじゃないんじゃないかなというふうに思ったので。

水越委員　　ただ、これ、前回、我々が議論した内容ですよ。

大内委員　　言葉はそういうことがありましたよね。上品は、芦屋と西宮の違いで、上品と出てきましたよねということだけの話であって。

松本（康）委員　　だから、前はあれでしょう、品とか、リビングとか、そういうキーワードが出てきたというところで、多分、事務局さんは議論しやすいように、

こうやって。

大内委員 言葉を整理したけれども、それがキャッチフレーズでは私はないんじゃないかなと。

水越委員 要は、大内さんは案1から案4には反対だとおっしゃっているんですか。

大内委員 いや、そうじゃなくて、この中から組み立てていくんじゃないんですかと、キャッチフレーズを別途。

水越委員 それでいいと思いますよ。

大内委員 そういうふうに私は思いましたけれども。

水越委員 それでいいと思いますよ。

大内委員 それでなかったら、これ、案1の賛成の方、案2の賛成の方、3、4と選んでいけば、それで済むということでしょう。

久委員長 だから、それはきょうはまずはしなかったでしょう。しかし、これも我々が今まで議論をしてきた言葉を理念的にまとめたものですから、これも一つの案ではないでしょうかという提案なんです。

田中委員 確かに、この四つの案の中で、後ろの西宮という言葉を取れば、これ、どこのまちかというのは全然関係ないですよ。全部、どこのまちでも使える言葉ですよ。

森下委員 そんなことないと思いますよ。

田中委員 そうですか、「人が集い つながり育む Living City」と書いたら、これ西宮という言葉を除いてしまうと、これ、西宮ということはどこにもイメージとして湧かないですよ。

室崎委員 私も、さっきの品という言葉だったりとか、何か感じさせるものはあるかなと思いますし、あと私なんかがここの今回の会議に出させてもらって思ったのは、西宮市民の方が物すごく積極的で、こんなに何かまちづくりだったりとか、そ

ういうのに参加しようとする方に私は余り会ったことがなかったので、そういう意味では、何かはぐくむとか、皆さんがつくっていかうとしているような感じがするというような、そういう動詞というか、何か動かうとしているみたいなものが入っているとかなというの、何か単なるきれいな目標だけを並べているわけではない感じはするかなと思っていたんですけども。

水越委員 何かワークショップでずっと出ていたのは、結局、西宮はアイデンティティが物すごく薄いですよという話ですよ、もともとね。だから、西宮らしさというのがすごくとらまえにくいんですよ。なので、議論があちこち多分いっちらうと思うんですよ。

だから、ある程度ふわっとしたものしか多分できないと思っていて、そうじゃないと山口の地区の人、甲東園の人、じゃあこのビジョンを私のビジョンと思えないんじゃないのかなと。

田中委員 確かに、山口の人から苦情は出ているんですよ。向こうのほうの人からね、こっちの話は一つも出ていないじゃないかと。だけどね、それはあくまでもマスタープランのイメージとしてつくっているだけで、個々の話をしているわけではないからということで我慢してもらっているんですけどもね。

水越委員 そうですね。だから、余り個々の話が見えるような理念にしないほうがいいですよ、逆に言えば。それは地区別でやりましょうということですね。

田中委員 そうなんです。これから先の話ですよ。

水越委員 ですよ。

私、もう一つ思ったのは、どうしてもワークショップに参加している人たちは、申しわけないですけども、ある程度時間とか生活にゆとりがある人が多いと思うんです。で、そうじゃない人もいっぱい西宮にはいて、その人たちの意見は今のところ全く反映されていないわけですね。

一応、インターネットで公募とかすると思うんですけども、それも要は、そうい

うことにたけていて、かつ時間がある人だけになっちゃうんで、意見が今まで反映されていないサイレントマジョリティみたいなものも意識して話をしないと、ちょっと方向性がおかしくなっちゃうのかなというのは、すごく気になっていたんです。

田中委員 それは、マスタープランのワークショップをやっているときにいろんな方がおられましたから、それは今さらそこを戻そうとしても。

水越委員 戻せということじゃなくて、最終まとめるときに、一応意識はしておきたいなということです。

久委員長 先ほど水越さんのお話で、ちょっと非常に乱暴な、こんな方法もありますよという話をさせてもらえば、「これからつくろう西宮らしさ」みたいな理念もあるんですよ。「みんなでつくろう西宮らしさ」みたいな。

大内委員 さっきの水越さんの意見のところ、結局、4班でも出たのは、少し私がしんしゃくするとすれば、結局、へそのないまちだねと。だから、一つにやっぱり芸文センターを中心にしたまちづくり、例えば田中さんのおっしゃっている、そういうプランニングがあっても、全体のまちづくりを見たときに、建物の質感とか高さとか、全体、多分、調和がとれていないと思うんですね。

私が考えるのは、じゃあ設計屋さんのコンペでできたのかどうか私は知りませんが、ある質感があって、それから建物同士の調和があれば、それ全体が大きな一つのイメージをつくり上げるはずですよ。そういうまちづくりをやっぱり目指すということは何かということ言葉を選択していくのかなというふうにも思ったんですけども、だからここにこういう言葉、つなぎ合わせで初めに出てきちゃったんですけども、芸文センターという言葉が出てきたことをちょっととらまえてみようということで、やっとタベ選び出した言葉だということで紹介したまでなんですけれども。

各論の思いと各論で出てくる希望というか、願望と、議論が行ったり来たりしていると思いますけれども、それはどこかで打ち切らないと切りがないと思いますね。前の回もそうでしたし、だからそれは各論で、皆さん各班に帰ったときに、こういうフ

レーズにして、これから各地域の土地利用計画とか地域の資源とかを考えて具体的なものはやっていきますよみたいな説明をしていかないと、多分いかんのじゃないかなと思います。

久委員長 この資料の4、私もきょういただいて、ぱらぱらっと読んでみたんですけれども、このときにやはり石油精製工場を阻止しているのが宮水なんですよ。

大内委員 要するに産業のまちではないということですよ。

久委員長 何が言いたいかと言うと、やっぱり宮水の存在というのは大きいということなんですよ、西宮の都市計画に対してはね。

そういう一言でわかりやすいものがやっぱり理念としてはわかりやすいので、どうしてこれがだめなのか、どうしてこちらの方向なのか、どうしてこれはいいのかと言われたときに、いや、宮水が大切でしょう。宮水がなくなったら、これはだめでしょうと言いきれちゃいますよね。そういう理念がいいんですよ。

瀬川委員 6班の中で、水というのは、六甲山から流れてくるというのか、南北のつながるものだという論議もあったんですよ。歴史的なものだし、実際、宮水がどこまで現在使われているかという、決してそんなことではないんですけれども、やはり宮水というのは非常に大事な物として残していきたいなという思いがベースにあったんですよ。そのとき、産業か文教かという論議はしていませんけれどもね。

大内委員 山口の方々にしては、山口は、有馬温泉に行って、あの近くを通ることになるんでしょうかね、ちょっと地理関係はわからないんですが、きのう初めてインターネットで山口というまちのホームページみたいなのをみつけて、あら、このまちの中で何か完結するんじゃないかしらと、生活がね、そういうふう思ったんですよ。

何がじゃあ西宮市と、何か合併で途中で有馬からこっちへ来たとかなんかで、実際の生活は神戸の北とのつながりが多いとか何かの説明があったんですけれども、基本的に西宮市の成り立ちを見たときに、やっぱり武庫川がつながって、有馬の坂を登っ

ていって、山口地区があって、もともとは何なんだろうなと思って、どうも杣と書いてあったから、きこりというか、要するに木を切り倒して、武庫川を下ってきて、それで例えば大阪城をつくったりとか、あるいは神戸の住吉神社をつくったりとか、そういう背景がどんどん歴史的にあったんじゃないかなと理解したんですよ。

だから、おっしゃっている西宮とのつながりどうのこうのということも、各論の中では、そういうことは頭に浮かべながら、理解しながらやることは可能だなと、これは各論の中だなと思いましたがけれども、決してつながりがないわけであって、歴史的に見たときに、それは今後の議論の中で可能だというふうに私は思いまして、タベ、慌ててインターネットを、山口は交通の拡散問題で議論にもなったけれども、どういふところなんだという疑問から、そういう提示があって、知識として大事なところがあるなとは思いました。公智神社、それはやっぱり久々能智の氏とかという、そういう樹木を扱う人々の集団というのがもともとあれで、7世紀か6世紀ごろの何か集団みたいなことが書いてありましたけれども、だからそこでやっぱり樹木の供給基地でもあって、ひょっとしたら西宮の宮水の酒だるの原材料供給地でもあったのかなと思ったり、勝手に想像したんですけれども。

田中委員 そこまでと違って、あそこに化石木というのがあるんですね。要するに、木がそのまま化石になったやつがあるんですね。こんな大木ですけれども、そういう化石になったやつが神社にあるんですよね。そういうことがあるから、もともと木がいろいろあったことは確かなんですけれども。

大内委員 樹木との関係なのかなと。だから、それは武庫川と、地域的には違うでしょうけれども、猪名川と一緒にだったりなんかしたというあれもあるようですけれども、そういうことは可能だなとつくづく思いました。

だから、さっき言ったとおり、フレーズというのは、一体全体、大和言葉にこだわりますけれども、何かそういうふうにつくって、あとは各論でおろしていくということとでいいんじゃないかなと思います。もう繰り返しですから、やめますけれども。

久委員長 そう考えれば考えるほど、先ほど松村さんもちらっと言ってくださったように、6班それぞれはやはり時間をかけて一つの言葉を絞り出していますので、それなりのしっかりした言葉になっているんですね。

全体、余りここに触れずにワークショップになっちゃいましたでしょう。私はここを触れるものかなと思っていたんですけれども、それはさておきになっちゃったんで。

松本（康）委員 さっき松村先生の思っていた「宮っ子の“えん”」というキーワードとか、6班の「みやミズム」というのが出てきたとき、私、やられたなと思ったんですよ、正直。いい言葉なのかなと思いますし、これからさっき大内さんもおっしゃったように、キーワードを組み合わせでキャッチフレーズに、きょうもあと1時間でしないといけないんですけれども、こういうプランも出てきたので、つなげていかなきゃあないですね。

森下委員 情報から言いますと、2班のときも実は「宮っ子の“えん”」という「えん」は、僕ら逆に2班ではやられたなと思ったんです。

松本（康）委員 そうですか。

森下委員 100縁市場がちらほらと最近よくやっているんですけれども。実は、先生の御紹介のあった100えんの「えん」は、この「縁」を使っているんです。だから、「えん」で結ばれている、そういった人たちが非常に、なおかつ私自身は七番町に住んでおったんで、甲子園の「園」で、そういう意味では、自分の中ではおもしろいなと思ったんですけれども、先ほどから話の出ている地域別の構想と総括しているキャッチとのいつも行ったり来たりしているのが非常に気にはなりながら、決まるのかなと。

藤本委員 地域は七つですよ。

森下委員 ええ、だから山口、確かに僕らもこの前、まちなみ発見で行きましたけれども、非常に確かに歴史もあって、子供らも喜んで、ああ、こんなところがあるのやと思ったけれども、じゃあ南の子があそこで「わーよかった、住んで」と思う

かと言ったら、また違udarouなど。やっぱり、それは地域別構想で持ってこないと、キャッチではないかなと。

松本（康）委員 でも、6班の「みやみずム」、これ言ったら、六甲とか、武庫川とか、夙川とか、いろんなそういう意識できるような、前進的なイメージのできる言葉だと思います。

「宮っ子の“えん”」というのは、別に住宅街のほうのことばかりですけれども、西宮らしい言葉かなと思います。

瀬川委員 七園も、説明の中で随分歴史的な話がありましたよね。そういう歴史を大事にしてきている、歴史を大事にするというのは、それがつながりベースだし、そういったものは今後もつなげていこうじゃないかという思いがあったというふうに理解しているんですよね。それは、ある意味、水も同じなんですけれどもね。

田中委員 この「えん」という言葉自体が、甲陽園とか甲東園とか、これは全部、阪急線とか電車ができた後にできた言葉ですから、昔からある言葉じゃないんですよ。後、後にできた言葉なんです。

だから、その歴史的云々じゃなしに、電鉄会社がつくったときにできた言葉なんですよね。

森下委員 それは、この「園」の「えん」で。

田中委員 「えん」のもともとの「えん」は、例えば甲風園とか、甲東園とかという、その「園」は電鉄会社がつくった名前なんですよね。

久委員長 そういう意味で言うと、阪神間そのものが大正・昭和初期にできたイメージなんです。

田中委員 ですから、歴史、例えば江戸時代以前のこと、だから平安以前は海だったんですからね、ほとんどが。だから、そんな昔、昔のことを言ってもしょうがないので、それは今おっしゃったように、最近の言葉でみんなが認識しているから、それはいいと思うんですけれどもね、使うこと自体は。

大内委員 だから、それはせんだってのワーキングショップのキャッチコピー
ということでああいう言葉を選んだんでしょ。だから、キャッチコピーと今回のキ
ャッチフレーズとをどう使い分けるのかちょっと私まだわからないんですけども、
つくり上げるということがねらだから、それは抽象論で言えば、ああいう「えん」
を七つ並べた、それにはやっぱり人のつながりとか、歴史性とか、云々とか、そうい
うことを多分4班の人たちはもう言っているわけで、もう繰り返しになるので、やめ
ます。

瀬川委員 前回の進め方、市役所の提示の仕方にちょっと課題が残ったんじゃ
ないかなと思うんですけども、前回、いきなりキャッチフレーズを論議しましよ
うという話があったんですけども、一度、キャッチフレーズとは何なのかと言うと、
わかってはる方はわかってはったんでしょけれども、僕自身はなるほどと思ったの
は、前回の一番最初に配られたマスタープラン構成のイメージの資料5がありますよ
ね。資料5、西宮と新しい都市計画マスタープランどうのこうのとありますけれど、
その一番上に「まちづくりの将来像・基本理念＝暮らしとまちのビジョン」とありま
すよね。

前回は、このことを簡単な言葉でわかりやすく言うとしたら、それを仮にキャッチ
フレーズということでやりましようという丁寧な説明があったらよかったんですけど
も、ここの確認がないまま、いきなりキャッチフレーズという論議に入りましたの
で、ちょっとそこに誤解があったと思うんですよ。大内さん、そういうことじゃない
んですかね。

大内委員 言いかえたらそういうことになるのかもしれないけれども、私、第
2回目の三宅先生の最後の締めくくりの言葉で「大和言葉云々」と言われたので、そ
れにこだわってずっと来ていたんで。

田中委員 あのとき、大和言葉というのは、別に英文でという意味と違う言葉
で、英語、英語、英語を使って、ということ言われた私は理解したんですけども

ね。

大内委員 片仮名じゃなくてという言葉があったので。

水越委員 提案なんですけれども、先に、申しわけないんですけれども、先にまちの将来像を確認してから、基本理念の言葉を決めるというのではだめでしょうか。

というのは、基本理念を考えるときに、皆さん、後ろに自分の理想とする将来像をお持ちだと思うんですけれども、この将来像の中でウエートづけが多分それぞれあって、それでしゃべっているから、話がずれがちな気がするんですね。

なので、提案なんですけれども、あくまでも、まず例えば将来像のトップに来るのは何ですかみたいな話を一通りして、今、8項目ですけれども、8項目を基本理念に全部盛り込もうと思ったら長くなってしまうので、例えばこれを大きくまとめると三つですとかというふうにすると、ちょっと議論がしやすいのかなと思うんですけれども。

田中委員 メールでやりとりするときが一番最初に考えたのは、私が言い出したのはそれなんですよね。誤解があって、皆、やっぱりこうしたい、ああしたいというイメージがみんながあって、それを抜きにしてビジョンの話を始めたから、なかなかまとまらないと。今、水越さんがおっしゃったように、最初にこんなことをこうしたい、ああしたいという意見が重なってきた上で、じゃあこれがいいんじゃないかというふうに決めれば、比較的スムーズにいったかなという気はしますけれども、後でそれをもう一回考えてみたら、久先生のおっしゃったことが私は逆に理解できたのは、結局、資料としてこれをいっぱいいただいているんですよね。それをもう一回読み直してみて、もともとの基本計画があって、じゃあその上にどうすればそれを市民に納得してもらえるのかと、この基本計画を変えようという意味は毛頭ないので、この上に何か市民に理解してもらえそうな言葉で、これをするためにあります、こういう計画がありますよという言葉の一つ乗っけてやればおさまるんじゃないかという気が、久先生の最初におっしゃった意味が最初は理解できなかったんですけれども、

後になってみたら、確かにそれは正しいなという気がしてきましたね。

水越委員 じゃあ、この将来像からつくるというのは、総合計画からつくるという。

田中委員 私は逆に、さっきから言う、物をかぶせていくのに一番必要じゃないかということ思い出したわけですね。

久委員長 私もちょっと迷っているのは、どちらの方向から入っても同じ議論になりそうだなと。

結局、皆さんお一人お一人、あるいは一班一班的の思いがあるんですね。その思いをぶつけ合っていますでしょう。そこで、どこかでやっぱり折り合いの線を見つけていかないと、どちらから入ったとしても、多分、これ、八つの中で順番を並べかえてくださいというだけで1時間たちます、また。そこで、また一つにまとめていくときに、いや、それは違うという話になると思うんですね。だから、その論旨展開をどうしたらいいのかなということなんです。

田中委員 そこで、さっき私が考えたのは、この部分の各班の最大公約数を抜き出していったんですね。じゃあ、どの言葉が当てはまるかということで私が考えたのは、そこから出てきた言葉なんですね。

瀬川委員 ただ、そのときに最大公約数になればなるほど西宮のらしさというか、個性みたいなものはどんどん遠ざかっていきますよね。そこが非常に難しいところですね。

田中委員 そこははっきり言って、個性を出す必要があるのかなという気がするんですね。

結局、個性じゃなしに。

瀬川委員 個性という表現はちょっとよくないかもしれませんが、やっぱり西宮の住民として誇りを持ってこの基本理念がそらんじることができることは、誇りを持って。

田中委員 例えば倉敷に行ったときにあれを見て、最初にどういうイメージを持つとか、そういう、要するに最初に出てくるイメージというのがそのまちの理念でもあるわけですね。

久委員長 ちょっと話は脱線しますが、今、うちの大学もたくさんの自校学習という時間があるんですね、1年生の一番最初に。みずからの学校を学習する時間。

何でかと言うと、今の大学生に愛校心なんていうのはさらさらないんですね。近畿大学に入ろうと、関学に入ろうと、大阪大学に入ろうと、どうでもいいんですよ、大学は。しかし、それでいいんですかと。せっかく4年間、学び、卒業するんだから、何々大学卒業ということで、やっぱり自分は大学に愛着を持とうよという教育を1年生の一番最初にするんですね。

だとするときに、なぜその話をしているかもうおわかりだと思いますけれども、西宮市民として一生を過ごすということで、西宮市に住んでいるという、何か一つの言葉みたいなものとか方向性みたいなものは共有しなくてもいいんですかという話です。「いいよ」という答えもあります。だから、「いいよ」ということだったら、もう理念なんて要らないわけです。「それなりに無事・平穏に一生を過ごせたらいいです」という答えもあるんです。だったら、これを一つの言葉に絞るとか、西宮らしさなんて言わなくてもいいんですよ。

田中委員 そうすると、都市計画そのものが要らなくなっちゃうということになりますからね。

久委員長 それはちょっと違いますよね。その個別利害を調整するための都市計画みたいなのが要るんですけれども、大きな方向性を目指して、やはり特徴を出そうという都市計画は要らないと思います。

水越委員 ちなみに、時間がないところ恐縮なんですけれども、愛校心を植えつける計画というのは、端的に言うとうどんのことですか。

久委員長 まず、うちの場合は初代理事長の方向性というのが明確ですから、それをDVDで見せます。50分。すごい感動させます。なぜ、近大マグロがそこから出てくるのかということもちゃんとストーリーの上に載っていますからということですね。それは、教員も全部見せられますよ。だって、近畿大学に勤めるんだから、初代理事長の方針に沿ってやってくれという話です。

それから、今度は大学の野球やアメリカンフットボールの試合を見せにいたりして、応援席に座らせて一緒に応援させるということでございます。

水越委員 それを西宮でやるとしたらということですよ。

久委員長 はい。

大内委員 やっぱり工業誘致しなかった、産業のまちでないというところがポイントなんじゃないですか。そこで人生の舞台を終えたいというのが私たち市民の偽らざる気持ちだと、通りすがりの人もいるでしょうけれども、私はそれが結論だと。

だから、私、家内に聞いてみると、何が欲しいんやと、我々は今こういう議論しているんだけど。それは、そこから新規特徴な希望が出てくるので、それを個別に言うと切りがないからやめますけれどもね。

水越委員 要は、だから住み続けたいということですよ。

大内委員 そうですよ、住み続けるために何が西宮で条件なのかということですね。

久委員長 うちの大学は非常にそのあたりが明快だと、もうちょっとその解説をさせてもらおうと、初代理事長は和歌山の山奥から貧しかったので、大阪船場へでっちに来ているんですよ。でも、勉強したいということで、苦学をして日本大学に入り直して、そこで実力が認められて教授になり、そして自分も、こういう自分の思い、貧しい人たちもいるだろうから、だれでも勉強できる大学をつくりたい。さらには、大学で教養をつけることによってよりよい暮らしができるんだという自分の理念・ポリシーがあるわけですよ。それを伝えたい。

ですから、実学志向というのは、やっぱりよりよく生きるための教養として学問というのはあるべきだということですから、役に立たない勉強は要らないよということで、うちの話としては実学志向というのが出てきているわけですね。だからこそ、今度、総合社会学部をつくる時に一番最初の言葉は、役に立たない社会学部は要らないと、役に立つ社会学部にしよう。そこはもうバシッと方向性が決まるんですね。

さらに、通信教育部があります。幾ら採算性が悪くても、通信教育はなくしません。それは、働きながらも勉強したい人たちに場所を提供する、機会を提供するというのが初代理事長の思いですから、そういう意味で言うと明快でしょう。何をよしとするか、何を切るか、もう一つの方針でバシッと決まるわけです。

水越委員 学校とか企業の場合は創業者がいますから、その人がカリスマでビジョンが明確であれば、ビジョンというか、基本方針ですよ、それを伝えていくということはできますよね。

ただ、市の場合は、特に西宮市は集まってできたという、集まってできた企業でも社是はあるわけで、それをつくるということなんですよ。

久委員長 そうそうそう。

だから、そういう意味では、西宮市で初めてかもしれませんよ、これだけたくさんの思いを持った方が集まってビジョンを絞り出している作業というのは。恐らく、そうじゃないですか、市民も含めて。

水越委員 逆に言えば、合併して、私の勤めている企業も、例えばいろんな会社が合併してできて、また合併して合併してっていうところなんですよけれども、そういうときに何をじゃあ社是とかにしようと言ったら、例えば集まってできた企業、あるいはそういう寄せ集めの企業のグループのビジョンということになると、今後、社会はどう進んでいくのかというのが一つの共有できるテーマなんですよ。その中で、我々はどんなものを持っていますかというのを議論してつくったんですよ。

だから、西宮でもしあれに似たように、もともとばらばらが集まってできたところ

だと思っんで、そうするとじゃあ日本の人口は減りますよね、西宮はふえていますけれども、減りますよね、そのうちという中で、今持っている自然とか、あるいは便利な立地だとか文化とかというものを持って、どう今後、みんなが住み続けたいようなまちにするのかということですよね。それを一言で何かあらわせたらいいいのかなと。

大内委員 別に一言でなくてもいいでしょう。

水越委員 でも、最終は一言にならないと、結局、共有ができないですよね。私たちはさんざんこうやって議論していますからわかっていますけれども、一市民としたら、通りすがりの人もいるわけで、でも通りすがりの人も市民だから、例えば5年でもいてくれる間はそのビジョンをわかってもらわないと、あるいは進出する企業にもそういうことを知らしめないで、エディオンさん、固有名詞を出したら悪いですけども、例えばですよ、あるいはドンキホーテさんみたいな話になるわけで、共有するためには、やっぱりシンプルで、わかりやすく、聞いてぱっとわかるというのがないとだめなんですよ。

大内委員 だから、それはいいことだけれども、具体的に何をということ議論しないと、ぐるぐるぐるぐるそれが回っているんですよ、前回から。

水越委員 もちろんそうですよ。

松本（清）委員 私も今、甲子園に住んでいるんですけども、あそこは鳴尾村と昔言っていたんですね。尼崎に行きたいか、西宮に行きたいかという住民投票をやって、西宮を選んだんですね、今から50数年前に。そのときに、やっぱり尼崎というのは産業のまち、西宮はやっぱり住宅都市だったと思うんですね、閑静な。鳴尾の人たちは、西宮を住民投票で選んだ。それはやっぱり住みやすいまち、住みたいまちという、何か美しい環境都市を選んだんじゃないかと、そういうふうに見えたんじゃないかと、それにあこがれたというのは、今も余り変わらんような気がします。

都市計画のマスタープランとしてあるのは、やっぱり「美しい」とかという言葉は、生活ともつながるし、何か閑静にもつながるので、何かこのフレーズの中に僕はぜひ

入れたらどうかなという気がします。

田中委員 もう一つ言うと、山口町が何で西宮に来たかと。この前、山口町の方としばらくいろいろ聞いてきたことがあるんですけども、もともと神戸市とどっちにひっつこうかという話がありまして、それで「なぜ神戸市につかなかったんですか」と言ったら、向こうは財産区がありましたね、その村そのものがいろんな土地とかいろんなものを持っていて、それで財産区を神戸市の場合は市が全部吸収してしまいますよという話と、西宮市は財産区はあなたたちが持っているですよということがあって、じゃあ西宮市にしようということで、飛び地なんですけれども、結局、西宮市のそういう提案があったから、西宮市に合併しましたという話を聞きまして、なるほどなという気がしたんですね。

松本（清）委員 鳴尾も鳴尾村が、財産区があります。

田中委員 そうなんですよ。皆さん、全部財産区があるんですよ。

瀬川委員 その話は聞くんですけども、財産区を山口が守りたいということは、どういうことなんですか。

田中委員 結局、今、村の財産なんですよ。村の財産としては、村にもともと住んでいる人たちの財産なんですよ。個人の財産じゃなしに、共有財産なんですよ。共有財産を神戸市が全部没収してしまうと、自分たちの、例えば高速道路ができて、インターチェンジができて、そこの土地を売るとしますよね。そうすると、そのまちにお金が入ってくるんですけども、公有地になってしまうと、それが入ってこない、自分たちの生活は困るということで。

久委員長 ちょっと脱線になりますけれども、一番わかりやすいのが、八尾市民病院というのがありまして、それを移転したんですよ。市の財産でしょう。その市がどうかこうとか言っているときに、村の人たちは、「何が市の土地やねん。あれは村の役場があった場所やで。おまえら八尾市が召し上げといて、何が市の土地だ。村に返せ」という話がありまして。

田中委員 財産区はそうなんですよね。

久委員長 そういうことです。

だから、すべての村、村から全部そういう形で市有地に変えているんです。西宮はお金があるはずですよ。

田中委員 でも、山口町はそれを市のほうに出さなかって、市が出さなくてもいいということなんで、西宮市に合併しましたとはっきり言いましたね。

久委員長 鳴尾もひょっとしたらそういう背景があったかもしれませんが、尼崎との比較だけじゃなくて。

松本（清）委員 しかし、私が聞いた範囲だと、やっぱり産業なのか、住宅なのか。やっぱり住みやすいほうをとったと。

藤本委員 これから言葉を決めていかないといけないと思うんですけども、私は、議論を聞いていたり、私、住民じゃないので、客観的に見せていただいたり、きょうの資料の資料2、ほかと比べているわけじゃないですけども、これを見せていただいたりしてやっぱり思うのは、どうしても人がすごく見えてきて、人が動いていて、人がつながっているというのがこのまちの魅力なんだなというふうに思うんですね。

それを考えると、やっぱりそういう言葉が、そういう人の動きが見えてくるような言葉にされたほうがいいと思いますし、私もこの前の5班の「えん」の話がおもしろいなと言ったんですけども、ちょっと何か変わった言葉をつけると、多分、マスコミも取り上げてくれたり、市民の人たちもふっと「これ何」と思ってくれたりする部分があると思うんですね。

だから、そういうやり方もあるし、そうじゃなくてもみんなでリピートしたらいいんだよという話もあるかもしれないですし、その辺、私は客観的に見ていて、やっぱり何かキャッチではっと思うような言葉をつけたほうがいいんじゃないかなと思いますし、本当に「宮っ子」も人が入っていますよね。何か、そういう人が見えるような、

人のつながりが見えるような何かキャッチがあったほうがいいのかなどというふうに思いますね。

松本（康）委員 やっぱり、各ワークショップの班の以前に発表された、この資料、これをちょっときょうのお昼、ずっと喫茶店でどんなことを書いているのかなと思って分類していたんですけれども、書いてあることは、自然の話と、それから人とのつながりの場の話、それから交通の話、活動の話、あと地場の地産、農業とか産業ということぐらいかなと思っているんです。

さっき室崎先生の話にあったのも、自然というのが、人とのつながりとかが目的なんじゃないですかというお話をされていましたが、もしそうだとするなら、乱暴な言い方になるかもしれませんが、人とのつながりの場と理解していいのであれば、さっきおっしゃったように、「人」というのをキーワードにして、真ん中でね、それで据えて、動き、躍動感をあらわすような言葉を入れて完成させるとか、何か絞っていくというプロセスを踏まないといけないのかなと。

ちょっと固有名詞を出してあれですけれども、サントリーのキャッチフレーズは「水と生きるサントリー」という、多分、ビールをつくるにはホップとかいろんな原材料があるはずなんですけれども、「水」と言っちゃっているんですね。多分、でも別に水だからと、ホップを捨てているわけでもないし、プロセスを捨てているわけでもないと思うんだけど、「水」というキーワードに何か多分いろんな意味を込めているんだと思うんです。

だから、それをそういうおもしろいキャッチにするにしても、平凡な言葉を使うにしても、何か絞ったキーワードにしていくしかないんでしょうねとなると、私も「人」を別にするというのは賛成します。

藤本委員 公共交通が伸びているというのは、やっぱり個人で車で動くよりも、だれかと触れ合いながら動こうという気持ちも感じますし、やっぱりNPOの存在も、ほかと比べていないのでわかりませんが、地区計画の多さというのを見てい

ると、やはり人が触れ合って生きているまちなのかなと思います。

田中委員 このNPO、何のNPOなんですか、言葉だけ聞いてもわからへんのですけれども。何と何のNPOなんでしょうか。

事務局 これは西宮市の登録制度がありまして、法人格をとって登録できるNPOと法人格のないNPOになっていない部分とを合わせているのですけれども、ほとんどが法人の資格を持っているNPOなんで、すべて含んでいます。

田中委員 すべてですか。

事務局 すべてのNPOを含んだ数がこの数字になってございます。

瀬川委員 ホームページには、けれどもこれだけの数は出ていませんよね、160も。

事務局 今、最新の数字、これはホームページに出ているかどうかはわからないのですけれども、この市民活動団体ガイドブックというのがあるので、公的な資料の中に出ている数字です。一番新しい150を超えているのは、最新のデータです。それまでがガイドブックに載っているという形になっています。

久委員長 そのあたりはまた後ほど議論をさせていただきたいと思いますし、NPOがふえているからと言って、決してつながりが増えているとは私は思っていないのでということです。

どうしましょう、あと30分。

田中委員 もう決めましょうか、もう結論的に。

大内委員 先だっけのときに藤本先生が最初に言われたことは、全体に班の発表はつながりが共通ですねとおっしゃったと思うんです。きょうの言われていることは、やっぱりはぐくむということがある。一体、西宮市は何をこれからはぐくむのか。私、そこに住んで、じゃあはぐくんで受け継いでいくというのは、我々の次の世代に残す課題として今与えられているなというふうに認識したんですけれども、もう一遍そこへ立ち返って、議論30分で決められるのか、いや、やっぱり出ないから、もう

一遍、途中で何か臨時にやりましようとなるのか、そこを目指していかないと、ちょっと締まりがないですね。

田中委員　　私、3班から言わせていただくと、3班はもともとこの「山海を人と緑でつなく生活エンジョイシティ」と、ちょっと横文字を入れてつくったんですけども、その後、皆さんとちょっと話をして、きょう言ったような、要するに確かにそういう話にはなったけれども、この中でそれを押し込んでしまうとまとまらないからということで、今、私がさっき言ったように、こういう形でしゃべらせてほしいということで皆さんに了解を得てしゃべっているわけなので、あくまでも自分の班のことだけを言うてしまうとやっぱりまとまりがつかなくなってしまいますので、その辺はもっと流動的に皆さん考えていただいて、西宮はこうやろうじゃないかということ素直にキャッチフレーズとして考えてしまったほうがいいんじゃないかなと私は思って、いろいろ発表させていただいたんですけども。

久委員長　　そういう意味で、6班のビジョンの内容をもう一度見ていただいたら、ほとんど同じことを違う言葉で言っているだけの話です。

だから、前回の話も若干参考にするとしても、この6班の話何かベースにしたほうが何かすっきりするのかなというふうな感じがしました。

瀬川委員　　先ほど六つの班で共通的なものを整理してくれたじゃないですか、それを四つ言いましたよね。そこにちょっと。

田中委員　　私はその最大公約数として考えてみたんですね。

松本（康）委員　　ちょっと私なりの分類なんで、あれですけども、人とのつながりのための場と、人とのつながる活動の話と、人とつながるための移動交通の話、それから自然とか山・緑・海という話と、資源・資産と。例えば農業とか、農業も自然のつながりなのかもしれないですけども、あとそういう地場産業と、こんな話かなというふうに、私の分類ではこうです。

瀬川委員　　例えば、はぐくむと提案がありましたけれども、はぐくむというの

も活動の中の一つですか。

松本（康）委員　　そうですね。だから、結構、教育、育児、介護という話もあったんですけども、それももう例えばそれはもう活動の中かなと。

久委員長　　ちょっとついでにお話をさせていただくと、1班の「ひと・まち・自然がのびやかにつながる」という話で見ると、人がつながるでしょう、自然がつながる、まちがつながる、だからもう一つ、まちがつながるということになりますよね。

それから、2班の「世代をこえて学び育み、“恵みあふれる”暮らしたいまち」、世代を超えてというのが、人のつながりの中で世代を超えるという、世代間のつながり、あるいはもっと大きく言えば、伝統というか、歴史的なつながりみたいな話もありますよね。

それから、3班の「山海を人と緑でつなぐ生活エンジョイシティ」という話で言うと、人が入っていますし、緑、自然とのつながりが入っていますよね。そういう意味でも、ここにちゃんと入っているということですよ。

それから、4班の「みんなの一步で100年つなぐ緑と人の回廊」、100年つなぐというのは、この伝統とか歴史の話ですよ。さらに、みんなの一步というのは、この活動で、一人一人から始めようという話なんですよ。

それから、5班は、これ、いろいろ入っているので、ちょっとこれ入れにくいんですけども、全部いろんな形で入っていますよね。

それから、6班のみやみずみに西宮のまちづくりというのは、ここの地場の資源の中でやっぱり宮水という存在をひとつしっかりとやっていこうかなという、こういう感じですよ。

そうすると、もうかなり絞り込めるのかなというような気がします。これを含めた非常にわかりやすい短い言葉が見つかった。恐らく、1班から6班までほとんど同じことを言っています。だから、どれをとってもいいと思うんです。

先ほど松村さんがおっしゃったように、何で3班が選ばれてんとか、何で4班が選

ばれてんというのは、皆さん、お帰りになってちゃんと説明を。

大内委員　　まちのつながりというのは、何か地域、地域ということでいいんですか。例えば高木とか山口とか瓦木とか、そういう意味でとらえて。

久委員長　　1班の方。

水越委員　　そういう意味です。

大内委員　　昔の村のつながりということですよ。

久委員長　　それぞれの特性を生かして、全体のまちをとということになるんだろうと思います。

水越委員　　そうです。もともと北と南がみたいなところから出てきた話です。

大内委員　　私はそうするのがいいなとは思っていましたが。

久委員長　　だから、そういう意味では、一番すっきりしているのは1班なんです。「ひと・まち・自然がのびやかにつながる」と。

松本（康）委員　　だから、まとめ技でいくと、「ひと・まち・自然」とか、あとうちの「宮っ子の“えん”」とか「みやミズム」、あれ全体、何となくぼやっとカバーしていると思うんですよ。

もう一つ、例えば自然とのつながりというのは、さっきの室崎先生のお話でいくと、人とのつながりの場なりというのを支えるためのものであるとなっていて、上にもう込め、例えば地場の資源・資産というの、やっぱり人がいてこそ地場の資源だということで、これも人と言って、さっきの「水と生きるサントリー」じゃないんですけれども、「人」というのに絞っちゃうというのもありだと思うんですけれども。

久委員長　　「人」に絞るというのは、どういう意味。

松本（康）委員　　「人」というのを前面に押し出す。さっき藤本先生もおっしゃったような、人の躍動感とかつながりというところをもう前面に押し出して。

瀬川委員　　例えば、この1班のをベースで考えたら、「のびやかにつながりはぐくむ」と入れたら、もっと具体的になっていきますよね。

久委員長 1班、かなりすっきりしているから、私が思うのは、まず「ひと」でしょう、一人一人からスタートしていますよね。「まち」というのは、人が集合した姿ですよね。さらに、そこから私たち人間社会と自然の関係を考える。一つ一つ大きくなっていくんですね、「ひと」「まち」「自然」という関係になってくると。そういう意味では、案外すっきりまとまっているのかなという感じはしないことないですけどもね。

大内委員 人が集まってまちができたんだから、そうかもしれませんけれどもね。

水越委員 あとは、一ひねり加えるか、こういう普通の言葉にするかということころですよ。

大内委員 あとは片仮名で書くか、「人」と一文字で書くか、「人間」と書くかということころですね。

久委員長 何でこれ、1班と言っているかと言ったら、2班から6班までは何か一癖ある言葉が入っているんです。1班が一番素直な言葉が入っている。

瀬川委員 その特徴を出そうという気がありますんでね。

松本（清）委員 僕、やっぱり5班、6班が西宮というオリジナリティがありますよね。5班のはなかなかいいと思うんです。

この「宮っ子の」という、これを「宮水の」としたらどうかなと思うんです。というのは、西宮の水は伏流水で山のほうからずっと地面を伝わってこっちに上がってくるんですね。だから、宮水がまちをつないでいるということで、「宮水の“えん”ではぐくむ美しいまち 西宮」とか、何かオリジナリティを出して、そこにこの七つの「えん」が、やっぱり七つあって、この七つがこのまちの将来像のところ七つあると、一つ一つの言葉を説明する。そうすると、非常に基本理念とまちの将来像もつながるし、宮水で南北もつながるし、何かオリジナリティもあるし、いかなもんでしょうか。

久委員長 宮水は、さらに言えば、海水からのミネラルも含まれているということになりますね、海ともつながっています。

松本（清）委員 なるほど、海ともつながっている。

水越委員 つながっているんですね、水が。

久委員長 だから、伊丹では宮水ができないんですよ。海に近いから湧き出ているんです。

瀬川委員 山と海と完全につながりますよね、宮水。

久委員長 そういう意味での宮水。

松本（清）委員 何か聞かれたときに理由が言えるというか、幾らでも話が広がるような気がするね。

久委員長 そうですね。

松本（清）委員 ワイドで理由が言えるというか、幾らでも話が広がるような気がするね。

やっぱり「美しいまち」というのは、僕は何か個人的には都市計画マスタープランなんで、何か入れたいと思うんですね。

久委員長 「宮水の“えん”がはぐくみ、つながるまち」ですか。

松本（清）委員 いや、「宮水の“えん”ではぐくむ美しいまち」、「はぐくむ」はどこかに入っているという、「宮水の“えん”ではぐくむ美しいまち 西宮」、それでこの七つの「えん」をサブタイトルで七つの「えん」とやって。

田中委員 「えん」は。

松本（康）委員 この「えん」自体は、実はその下のさっきのまちの将来像というところをもう少し精査しないと、ちょっと当たる場合があると思っているんです。

松本（清）委員 それ、何か七つの地区があるわけですよ、ここに、西宮に。

松本（康）委員 その漢字を当てて、こういうまちの将来像を。ちょっとこれから調整は要るかなと。

久委員長 だんだん絞られつつありますね。休憩しますか。

5分でいいですか。4時15分に再開しましょうか。

松本（清）委員 つながるとやったんです。

大内委員 「はぐくみ、つながる」でもいいんじゃないですか。何も短く短く
せんでも。

瀬川委員 いやいや、「はぐくむ」ほうがいいと思いますけれどもね。「えん」
というのは既につながっていますやん、「えん」という言葉は。

松本（清）委員 僕はちょっと伏流水をイメージしているので。

久委員長 ちょっと休憩して、もう一回、休憩後に見直してみてもいいですか。

（休 憩）

久委員長 それでは、再開させていただきたいと思います。

今、松本先生の提案で、「宮水の“えん”でつながる美しいまち 西宮」という御
意見が出ておりますが。

水越委員 すごくいいと思うんですけども、一つだけ気になるのが、何かア
クティブな感じがちょっと薄いかなと。だから、「つながる」のところを「つなげ」
とか。「つなげ」じゃ、おかしいですね。「つなげる」とか、例えば動詞を。

松本（清）委員 “えん”でつなぐ”でもいいんですか。

水越委員 “えん”でつなぐ”でおかしくないですか。

田中委員 「つなぐ」のほうが説得力があります。

松本（清）委員 動的な感じが。

大内委員 「がる」よりも、「げる」だと、何か自然につながるんじゃないかと、
意識的に。

松本（清）委員 七つの「えん」を考える。

田中委員 括弧して「えん」の七つの文字を、こういうことですよということ
で、下にサブタイトルで「縁」「沿」「艶」「円」「園」「援」「宴」というふうに。

久委員長 ちょっとそこまでは。

「宮水の“えん”でつなく美しいまち 西宮」、いかがでしょうか。

松本（康）委員 今、ちょっと考えたんですけれども、これでね、こじつけですよ、これ。その右側に皆さんから出てきた意見の集約したのをちょっと見て眺めていたんですけれども、例えば宮水、最終的には六甲山に降ったやつが水になって流れてきて、海で出会って、酒をつくってということで行くと、例えば人とのつながりの場なんて言うと、今度、やっぱり酒というのは宴会のネタになるものですから、人とのつながりの場をつくる材料でもあるわけだし、そこからいろんな活動というのも出てくる、情報交換とか、森林との活動というところにつながってくるのかなと。

あと、宮水というのは、六甲山からずっと、途中どこか一つ欠けても流れてこないものであるということで行くと、移動とか交通というようなニュアンスも出せるのかなとか。

あと、自然に関して言うと、海と川につながり、森とのつながりというのが宮水というところで象徴的にあらわしていると思いますし、地場の資産・資源ということでは、当然、酒づくりともつながるものだと。

割と何か宮水というのは、西宮らしさというのでまとまって、次の「えん」について。

田中委員 今、ネットで調べてみたら、西宮の水ということで「宮水」ということで、日本じゅうで西宮だけしか使っていない言葉です。

大内委員 商標登録みたいなものを。

松本（康）委員 とってるんですかね。

森下委員 ここへ来て、個人の話になると思うんですけれども、2班の中で話をした中では、今の話は非常に全部網羅されていまして、「えん」という言葉の中には、当然、世代間であったりとか、世代を超えてというか、僕らは「はぐくむ」という言葉になったんですが、その「はぐくむ」の中には、当然、縁があったりとかとい

うことに対してもある程度のことが含まれています。

そして、なおかつ「宮水」という言葉に対しては、実は僕らの班の中に宮水の役員らしき方がいらっしゃいまして、宮水学園というのを非常に強調されていて、僕、最初は「宮水学園とは何かな」とわからなかったんですが、宮水学園ジュニアですか、子供との関係があるとかで、多分、非常によくやったと言われて帰ってくるんだろうなという気がします。だから、多分、うまく話の中では「ええやん」という感じかなと、「よくやった」という感じかなと、「やりよった」という。

瀬川委員 おっしゃった宮水学園ジュニアは、来られている方をジュニアと言うんですか。

森下委員 宮水の学園の高齢者の方と小学生のジュニアの方が公民館で作業を、いろいろつくったりされるんですって。

瀬川委員 なるほど、なるほど、その宮水にもつながるよというわけですね。

森下委員 つながります。だから、宮水学園のそういうところを含めて。

田中委員 その「えん」は「園」ですよ。

久委員長 そうですね。

瀬川委員 それと、先ほど水越さんの提案で、アクティブに「つなぐ」となりましたけれども、もう一つやっぱり進めて「つなぎはぐくむ」としたいんですよ。「はぐくむ」というキーワードにこだわるんですよ。

というのは、やっぱりこれは個人的な思いもそうだし、6班でもそうだったんですけども、やっぱり我々の世代は次の世代の子供たちを育てていく、伝承していく、このまちをはぐくんでいくと、この思いがあるんですよ。そんなのは、多分、もとの5班の思いもあったんじゃないかと思うんです。この「はぐくむ」というのは、非常に大事なキーワードだと思うんですよ。だから、「つなぎはぐくむ」ではいかがでしょうか。

大内委員 私もちょっと「はぐくむ」は、松本先生のおっしゃったのがあるん

ですけれども、文教の教育ということからいくとね。

田中委員 ただ、言葉のつながりとして、ちょっとやっぱりそこで切れてしまいますね。「つなぎはぐくむ」となると、言葉のつながりがいまいち。

水越委員 そうですね。

大内委員 だから、それは「はぐくみつなぐ」のほうがむしろ言葉と順番としても。

久委員長 「はぐくむ」というのは、子供たちを育てるだけじゃなくて、今の状態よりよりよくすることができる、だからつながりというだけじゃなくて、美しいまちをさらに発展させましょうという意味を持っています。

田中委員 だから、ちょっと言葉を、それこそつなぎ方を変えないと。

大内委員 「はぐくみつなぐ」でいいんじゃないですか、ごろとしてはそのほうが素直だと思いますよ。「“えん”ではぐくみつなぐまち 西宮」、「はぐくみ」だと思いますよ、言葉の順番でいくと。

水越委員 「はぐくむ」だけにしたらまずいですかね。

久委員長 「つないではぐくむ」のか「はぐくんでつなぐ」のか。

大内委員 「“えん”をはぐくむ」のでしょう、お年寄りの場も欲しいでしょうし。

藤本委員 美しいまちをはぐくむんですよね。美しいにすぐ係ったほうがわかりやすいんじゃないですか。

久委員長 「はぐくむ美しい」でしょう。

松本（康）委員 両方書いておきましょう。

松本（清）委員 「えん」というのと、「えんが」というのとは。

大内委員 意味としては、どちらもいいですけれども、言葉の語順といいですか、韻を踏むみたいな感じで、それ、だれが得意な人、いませんか。うたをつくったりする人。

久委員長 演歌は四三なんですよ。七、七、七、七、七、七、七。七五、七五、七五でつながるんですね、演歌というのはね。七五の七の部分は、四三につながる場合が多いんですよ。演歌が好きな人は四三でつなげればいい。

松本（清）委員 「で」と「が」とあると思うんですね。それもちょっと議論していただいたらどうでしょうか。

大内委員 「はぐくみ」でしょう、「美しい」で、ちゃんと韻を踏んでます、これ。いいんじゃないでしょうか。

どっちでも意味は、「つないではぐくみ」でも「はぐくんでからつないで」も、どちらでもいいと思います。いいやすい言葉ということが主体だったでしょう、先ほどの議論は。だから、あとリズムの問題です。

田中委員 言葉として、「“えん”が」と、「が」にすれば、先生がおっしゃったように、「“えん”がつなぎはぐくむ」と、それだったら言葉としてつながりますね。

大内委員 「は」と「つ」と「う」と、あいうえおでいくと順番になっているんですよ。だから、「“えん”がはぐくみつなく」と、そのほうが私はリズムとしてはいいなと思うんです。「はぐくみつなく美しい」のほうが、「は」「つ」「う」とあいうえおの逆になって、順番になっているから、それでいいんですか。「はぐくみつなく美しい」と。

水越委員 「“えん”がはぐくみつなく」ということになると、「えん」が主体ですよ。

松本（清）委員 そうです。そうなります。

水越委員 そうなりますよね。

そうすると、「えん」を人と、要は、人が主体のほうがいいとっていて、その「えん」に何の意味を込めるかなんですけれども。

松本（康）委員 多分、あの辺のみんなのニーズというか、思いというのが、多分、この「えん」の中にどーんとしてくるような気がするんですよ。

水越委員 何を言っているかと言うと。

松本（康）委員 それを主語にしていいかですね。

水越委員 そうなんですよ。何かちょっと受動的になるとよろしくないなど。

藤本委員 「つなぐ美しいまち」になると、もう既に美しいまちがあって、美しいですけども、それをつなげるように感じますよね。やっぱり「“えん”でつなぐではなくむ美しいまち」じゃないでしょうかと、意味からするとね。

田中委員 「えん」によりと。

水越委員 そう、「えん」によりという感じがいいんですね。

田中委員 ということは、「より」ということになると、「で」になるわけやね。

瀬川委員 「で」ですね。

大内委員 「えん」は既につながっているんじゃないですかね。

水越委員 人の「縁」というのはそうですけれども、ほかの意味も込めますでしょう、いろいろと。

田中委員 そうすると、もともとのあった「“えん”でつなぎはぐくむ」と、そっちのほう言葉としてはつながりますね、そう言われてみればね。

大内委員 「えん」は、例えば甲陽園の「えん」と地域もつなぐということですね。余り大きな問題じゃないから、皆さんの意見に従います。

久委員長 だから、一番上ですか、「宮水の“えん”でつなぎはぐくむ美しいまち 西宮」、「宮」で始まり「宮」で終わると。

水越委員 なるほど、いいですね。

田中委員 言葉として、五・七・五のつながりもいいですね。

瀬川委員 1字字余り。

田中委員 字余りもちょっとありますけれども、それはもう仕方がない。

久委員長 いいんじゃないかな。とりあえず、それでいきましょうか。ぎりぎり決まりました。

事務局、このあたりできょうは。

大内委員 「美しい」と言わんでも。

瀬川委員 ほかの表現。

大内委員 ちょっと直接過ぎるので、演歌のようになってしまう。

田中委員 それは私もさっきからしつこく言いますけれども、やっぱり西宮市というのは汚いまちにしたくないんですよ。

大内委員 今言っているのは、美しいというのを「美しい」という言葉で言っ
てしまわないで、演歌だと「悲しい」「悲しい」と言っているだけの話だから、同じ
になっちゃうので、「美しい」ということをもっと間接的に言えるような言葉はない
かなと。

文章を書くとき、そうでしょう。「悲しい」「悲しい」と書いたら、小学生の文章に
なっちゃいますよねと思ったんですが、ありますか。「美しい」ということを言わな
いで。

松本（清）委員 私はやっぱり都市計画マスタープランなので、やっぱり形と
か色とか、何かそういうのが出たほうがいいから、「美しい」が好きなんですけれど
もね。

田中委員 ネットでやりとりしたときも、都市計画の基準法との話も出てきま
したでしょう。やっぱり、「美しさ」というのがみんな欠けているんですよ、意識の
中で。

大内委員 「うるわしい」はいかがでしょう。

久委員長 華麗の「麗」ですか。

大内委員 平仮名でもいいですけどもね。

水越委員 「美しい」は、わかりやすいのはわかりやすいですけどもね。

大内委員 ただ、ちょっと何となく寂しい感じがするんです。

田中委員 そこまで言葉に。

久委員長 今、奈良遷都1300年祭をやっていますでしょう。その一番南側の道の大宮道路を3カ月前から地域の人たちと一緒に美しくしていこうということで、同じように理念をつくってやっているんですけども、その人たちもやっぱり大和ですから、「うるわし大和の大宮通り」と、「うるわしい」というのを「やまとしうるわし」というのがありますよね、故事の中に。その「うるわしい」という意味をいろいろ調べたんですよ。うるわしいというのは、美しいだけではなくて、正直であるとか、真っすぐであるとか、そういう意味も入っています。そういう意味でいくと、「美しい」というよりも「うるわしい」という意味のほうが広がりがあると思います。

大内委員 ちょっと西宮はそこまで雅かなという感じもしますけれども。

田中委員 宝塚の女優さんが歌っているわけじゃないから。

松本（康）委員 安倍総理の時代に「美しい国」というのに、何かあれに心の問題も込めたと、読めんことないかなと思って見てたんですけども。

大内委員 私、「ゆかしいまち」とも思ったんですよ。

田中委員 ちょっと意味が違うかな。

松本（康）委員 逆にそうなると、また静かな。

大内委員 行ってみたいという意味で、ゆかしいと、語源的に。

久委員長 とりあえず、「美しい」でいかせてもらいましょうか、しばらくは。ありがとうございます。

先ほども申しあげましたように、今までこういう議論がなかったのも、そういう意味では、非常にいい機会かなと。時間、2時間半でございますから、5時間かけています。やっと拾い出したということでございますが、そういう意味では非常によかったのではないかと思います。ありがとうございます。

それじゃあ、これをベースにまた事務局のほうでさらに詰めていっていただいて、また議論をしていきたいと思います。

大内委員 今の「とりあえず」という言葉がひっかかったんですけども、そ

ういう全体の中で、「とりあえず」というのはこの委員会のどういう位置づけに。

久委員長 またいろいろ下の将来像を考えたり、あるいは全体の内容を詰めていった中で、「うるわしい」という言葉のほうがいいとか、そういうところも出てくるのではないかなというように思いますので、これで決定したからもう二度と変えてはいけないということでもないのかなと。

大内委員 そのほうが班に帰ってから説明するのに。

水越委員 一応、決定ですということですね。

田中委員 一応、これできょう進んでいかないと、次。

久委員長 次のステップに行くために、これでとりあえず決定と。

瀬川委員 「ほぼ決定」ですね、グループ内に言うときはね。

水越委員 「決定です」と言いますよ。

田中委員 これをもとにして進んでいきますということで。

大内委員 今後の議論のための。

久委員長 またある程度、よりいい方向に進むのであれば、変えてもいいのかなというようなニュアンスで。

それじゃあ、その他、連絡を含めて、事務局のほう、よろしく願います。

事務局 事務局です。

次回ですけれども、再度、9月18日土曜日2時からこの場所で行います。内容としましては、当初の予定では、現在の都市マスの進捗状況の確認と全体構想の検討に入る予定になっておりますが、きょうの議論を受けますと、柱がまだ残っておりますので、そちらのほうの議論も行う予定になると思います。以上でございます。

当日は、9月18日は、午前中はまちづくり塾をやっておりますので、そちらのほうも御参加いただけると勉強になると思いますので、よろしく願いいたします。

以上です。

久委員長 ありがとうございます。

皆さんのほうからは何かございますか、御要望とか、いかがでしょうか。

それじゃあ、以上にさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

(終 了)